

[研究論文]

茨城県大洗町の観光地形成について

—地域文化の発展と観光地の形成・発展過程—

鎌田伸尚^{*}, 石井盛志^{**}, 萬里小路忠昭^{***}

〈要 約〉

本研究は、茨城県大洗町が観光地としていかに形成されたのかを、大洗ならではの生活・文化背景、自然環境、そして「保養地」としての発展経緯を踏まえ、古代から現代に至るまでを明らかにしたものである。加えて、東日本大震災やコロナ禍等、観光にとって非常に困難な時期を経ても発展を続ける現況や課題についても考察を行った。

キーワード：茨城県大洗町、観光地形成、保養地、エリア・ケイパビリティ、東日本大震災、コロナ禍

1 はじめに

1-1 研究の背景

コロナ禍を経て、今年度（2024年度）はコロナ禍前の2019年度とほぼ同等の基準まで観光業が復活するとの観測もある。円安を背景に、国内旅行が活性化しており、国内の観光地間の競争が激しくなっている。さらに、観光目的は従来の「自然に触れる」、「名所旧跡」、「温泉」等に加え、近年はアニメの舞台等の「聖地巡礼」もその目的となり、観光の多様性が増している。

観光地は、その発生から「観光地」と成るまで、それぞれ固有の理由と成り立つ方法があり、観光ブランド化している。一方で、施設等を充実させていく中で没個性となりがちな観光地も見られる。観光地間の競争が増している現状において人気の観光地と成るためには、観光地の形成過程を見直し振り返ることで、当該の観光地の真の価値を問いただし、明らかにすることにほかならない。

1-2 研究の目的と方法

本研究では、まず国内の観光地の形成過程の類型を確認し、その一類型として「保養地」に焦点を当てることで、茨城県大洗町についての観光地形成のプロセスを明らかにし、大洗町の観光地としての価値を再認識し、今後の展望を考察する。

1-3 本稿の構成

本研究では、以下第2章において、国内の観光地がいかに形成されたかについて観光地形成の類型を整理する。続く第3章では、類型の1つである「保養」を起源とする茨城県大洗町の観光地としての形成過程を論じる。そして、第4章では、大洗の生活観光地としての可能性について考察する。

所属：* 観光学部観光学科
** 有限会社金波楼
*** 大洗町地域おこし協力隊

受領日 2025年1月14日

2 観光地の類型

観光とは「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とするもの」^{注1)}であり、さらに言えば、「およそ観光とは自己の自由時間（＝余暇）の中で、観賞、知識、体験、活動、休養、参加、精神の鼓舞等、生活の変化を求める人間の基本的欲求を充足するための行為（＝レクリエーション）のうち、日常生活圏を離れて異なった自然、文化等の環境のもとで行おうとする一連の行動をいう」^{注2)}。

そうした目的のために、あるいは行動のために訪れるのが観光地だが、日本全国の観光地はそれぞれに成り立ちが異なり、様々な形成過程を経て発展をしてきている。観光で訪れる観光地は、大きく3つに分類され、すなわち「観光地」、「レクリエーション地」、「宿泊地」に分類し、その下に詳細分類される^{注3)}。

a. 観光地

1. 街並み観光地
2. 都市観光地
3. 社寺観光地
4. 自然風景地

b. レクリエーション地

5. スキー場
6. 海水浴場
7. 農山村地

c. 宿泊地

8. 温泉地

上記は、全国の観光地を大きく3分類を可能とするものである。詳細分類は、その観光地の観光資源や特性を表している。

なお、この分類は、近年盛んとなっているアニメの聖地巡礼等「推し活」^{注4)}による特定地域の観光地形成（目的観光）を包含しておらず、新たに大分類として追加が必要であるし、複合的な特性を有する観光地（大洗もその1つ）の研究には複合観光地といった新たなジャンルも必要である。

なお、上記分類で取り上げた国土交通省のレポート^{注3)}では「海水浴場」に成功事例が含まれなかったとしているが、本研究で取り上げる大洗は海水浴を推進した保養地として発祥し、時代により、幾重にも観光資源が重なるように（多層的に）発展を遂げてきた経緯を次章以降で論じていく。

3 茨城県大洗町の観光地形成

3-1 大洗町の概要

大洗町は、茨城県の太平洋沿岸の中央部に位置し、東西約2.5km、南北約9.0kmの細長い形をしている。面積は約23.89km²、県内44市町村の中で2番目に小さい町である。位置関係としては、県庁所在地である水戸市の中心部からは南東に約12km、東京からは約100kmの距離となっている。北は那

珂川を境にひたちなか市と、西北は涸沼川を境に水戸市と、西南は汽水湖である涸沼を挟んで茨城町と、南は鉾田市とそれぞれ接している。美しい海岸線はおおらかな湾形をなし、市街地はおおむねこれに沿う低地部に形成され、後方に標高25m～35mの丘陵を背負う。低地部には水稻が栽培され、丘陵部は畑や山林となっている。海洋性気候で、平均気温は茨城県の内陸地方と比較すると、冬は平均で1～3度高く、夏は2度前後低く、温和でしのぎやすい³⁾。

エリア・地区は、大きく4つに分類される。北から大洗海岸・那珂川エリア、磯浜市街地・漁港エリア、大洗サンビーチ・大貫エリア、涸沼湖畔・南大洗エリアとなっている。それぞれの特徴は以下の通りとなる⁴⁾。

(1) 大洗海岸・那珂川エリア

平安時代の日本文徳天皇実録に発出した大洗磯前薬師菩薩明神の創建以来、大洗を象徴し、那珂川清流を注ぐ豊かな生態系を持つ原始海岸に、信仰・漁労・保養・観光の文化を重ねてきた由緒ある保養地域

(2) 磯浜市街地・漁港エリア

縄文時代に海面下にあったと想像される台地と台地に挟まれた海浜低地で、現在は市街地が形成され、役場や公民館、文化施設、商店街、漁港、水産加工場が集まり、経済と交流の中心地として多くの人が住む地域。

(3) 大洗サンビーチ・大貫エリア

茨城県最大の遠浅の砂浜を持つ大洗サンビーチ海水浴場は潮干狩りやサーフィンの人気スポットで、ユニバーサルビーチの理念から誰もが居場所のあるビーチ文化が育まれ、海浜レジャーの可能性や別荘地が広がる新しい地域。

(4) 涸沼湖畔・南大洗エリア

涸沼はかつて奈良時代の常陸国風土記で、阿多可奈湖（あたかなのみなと）と呼ばれる水域があった場所として知られる、現在はしじみ漁で有名な関東唯一の汽水湖で、ラムサール条約に登録され水鳥の生息地として保全されている地域。

大洗町は、1953（昭和28）年10月1日の町村合併促進法施行以来、町村規模の適正化を図り、安定した地方自治の確立を目的に、1954（昭和29）年11月3日に旧磯浜町と旧大貫町が合併して誕生した⁵⁾。人口は、1960（昭和35）年には2.2万人を有していたが、その後は減少傾向となり、2000（平成12）年には2万人を切り、2024（令和6）年10月末時点は15,503人となっている^{6) 7)}。高齢者（65歳以上）人口は、1980（昭和55）年は10.9%の比率であったが、2024年10月時点では35.5%と高齢化が加速している^{6) 8)}。

産業別の就業人口割合は、第1次産業5.82%、第2次産業が25.86%、第3次産業が68.31%となっている⁸⁾。その中で、学術・開発研究機関、宿泊業、食料品製造業、飲食店の第3次産業を中心とした業種は雇用力が高い一方、基幹産業である第1次産業の漁業は就業者の高齢化が進み、就業人口の減少が進んでいる⁹⁾。また、水産加工業中心に2000年以降に外国人労働者の受け入れが進んでいる。外国人の人口は町の人口の5%を占め、その内、インドネシアが半数程度、ベトナム、中国、フィリピ

ンとアジア諸国が多くを占めている¹⁰⁾。

交通は、市内では1985（昭和60）年3月に開業し、水戸駅から鹿島神宮駅を結び、町を唯一走る鉄道路線「大洗鹿島線」やアクアワールド大洗ルート、大洗サンビーチルート、大洗南ルートの3ルートを走る循環バス「海遊号」、夏海地区、松川地区、神山地区方面を走るコミュニティバス「なっちゃん号」がある。鉄道・バスともに、町民の足として欠かせない公共交通機関となっている¹¹⁾。広域では、常磐自動車道や北関東自動車道等の高速道路網が整備され、南関東および北関東のアクセスを支えている。また、1979（昭和54）年5月に重要港湾の指定を受け、長距離カーフェリーの寄港を前提とした港湾計画が策定され、1985（昭和60）年3月には大洗～苫小牧・室蘭両港間にカーフェリーが就航し、現在は週12便の体制で、大洗～苫小牧間を運行している¹²⁾。

なお、古くから漁業を主体とした生活が営まれた大洗町の港は、明治後期から大正初期にかけて、港の建設が進められたが、漂砂の影響で港内が埋没した。その後、昭和30年代にかけて、新たに港湾建設の機運が高まり、1958（昭和33）年12月の地方港湾指定を機に建設を開始し、20年余りの期間をかけ、約80億円の建設費を投じ、漁港区が出来上がった。その後、2006（平成18）年から大洗港への大型旅客船の寄港誘致を始め、大洗港は国土交通省が世界へ紹介するクルーズポートとして位置づけられた。2023（令和5）年10月28日には大洗港で初めての外国クルーズ船「レガッタ」（乗客定員684人）が寄港した。港湾は大洗の発展における重要な柱であると言える¹²⁾。

もう1つ、大洗の発展に欠かせない柱として「観光」がある。明治期以降の海水浴や別荘滞在等をきっかけに、昭和期は水族館やゴルフ場、平成期はサーフィンやグルメ・ショッピング、2011（平成23）年の東日本大震災後はサブカルチャーの聖地と変遷してきた。大洗の観光資源としては、大きく「自然・景観」、「歴史・文化」、「人」、「食」の4つに分類される¹³⁾。観光入込客数は県内随一となっており、2019（令和元）年で年間441万人と、茨城県で最も多い数である。2020（令和2）年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で271万人まで減少したが、2021（令和3）年は281万人、2022（令和4）年401万人、2023（令和5）年は427万人と回復している¹⁴⁾。

その多くの観光客を受け入れるのに必要な宿泊施設や観光スポットも充実している。宿泊施設は、江戸や明治時代に創業された老舗旅館や民宿旅館、リゾートホテルを中心に、ここ数年は古民家をリノベーションした1日1組限定の施設やグランピング施設、サブスクリプション型の別荘施設等、新しい形態の宿泊施設がある。観光スポットは、日本一のサメの飼育数を誇るアクアワールド茨城県大洗水族館や平安時代に創建された大洗磯前神社、その神社の鳥居の1つである神磯の鳥居、地上約60mの展望室から360度のパノラマが楽しめる大洗マリンタワー、広大な砂浜と遠浅の海が美しい大洗サンビーチ海水浴場、ハマグリ・ホタテ・エビ等の浜焼きが楽しめる大洗海鮮市場がある。また、それらの観光施設・スポットの案内、お土産品の販売、レンタサイクル・レンタカーの貸出を行う観光案内施設としてうみまちテラスが大洗駅横にある。

その他、独自の取り組みとして、2014（平成26）年より大洗町ブランド推進協議会を設立し、大洗町のイメージ・特色ある地域資源を活用し、優れた農産物、水産物および加工品を大洗ブランドとして認証している。また、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、海水浴場の開設が中止となった2020（令和2）年の夏には、海水浴に代わる新たな取り組みとして、ゆっくりと波の音を聞きながら読書ができる砂浜図書館を開催し、多くの反響を生んだ。

このように、近年は人工的につくられた施設や空間等を中心としたハードの観光から、元々ある自然や資源、生活、伝統を活用したソフトの観光へとシフトしており、それは海水浴を中心とした「保養」の町として発展してきた歴史を持つ大洗の原点であると言える。

3-2 大洗町の観光形成

3-2-1 自然環境

大洗町の多くの観光資源は自然環境そのものや自然環境に対して長い年月にわたり人が働きかけて形成された風土に見つけられる。現在の大洗町の観光を本質的に理解するためには、大洗町の自然環境を知ることが必要である。ここでは大洗町の観光形成に関係した特徴的な地形と地質、その上に形成された生態系を紹介する。

a. 地形概要

大洗観光協会では、大洗町の観光的特徴を観光客に理解してもらうために、観光的に特徴が異なる4つのエリアに分けて情報発信をしている（図1）。町の東側は太平洋に接している。北側是那珂川によってひたちなか市と区切られる。西側は涸沼川と涸沼によって水戸市や茨城町と区切られる。このように大洗町は周囲三方が水辺に接している。



図1 大洗町は観光的特徴により4つのエリアに区分して情報発信している（大洗観光協会トップページより引用）

出典：大洗観光協会2024 <https://www.oarai-info.jp/>

さらに、大洗町の土地の高低を、地形図を用いて確認する（図2）。北側に島のような大洗台地があり、現在は市街地となっている低地を挟み、南側には大貫台地・夏海台地・鹿島台地がある。那珂川、涸沼川および涸沼の周囲は次項「地質の分布」で詳しく紹介するが、縄文海進や平安海進で形成された海岸平野が広がり、田園がつくられた。



図2 大洗町と周辺の地形（廣瀬俊介2024開運大洗プロジェクト調査計画支援業務報告書30頁より引用）

出典：国土地理院 地理院地図3D <http://maps.gsi.go.jp/>, 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所：全国遺跡総覧-官女平遺跡 <https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/11567>（廣瀬改変2023）

b. 地質の分布

大洗台地の海側に連なる奇岩風景として親しまれている岩礁（図3）は大洗層が露出したものである。新生代古第三紀・暁新世ダニアン期から古第三紀・始新世ヤブレスアン期（6600万年前～4780万年前）にかけて形成された礫岩の岩盤で、その深さは最大1kmにも及ぶという。大洗台地と大貫台地などの内陸側の段丘は、新生代第四紀後期更新世（約12万6000年～1万7000年前）に形成された。新生代第四紀完新世（約1万7000年前～現在）には、台地の太平洋側に波に運ばれた砂が堆積し砂丘ができ、海水準変動（縄文海進と海退および平安海進と海退）で海岸平野が形成され、海岸平野の中を流れる那珂川や酒沼川により自然堤防ができ、現在に至る（図4）。

c. 汽水域の形成

縄文海進

大洗町と水戸市の間に広がる田園地帯は内湾あるいはラグーン（潟湖）の跡であるとされる（図5）。縄文時代には海進が起こり、大洗の酒沼川から西の水戸市の千波湖や茨城町役場のあたりまで続く、低地まで侵入した海水が現在の那珂川・酒沼川水系と入り混じり、内湾あるいはラグーン（潟湖）の汽水環境が形成されたと考えられている。水戸市の千波湖畔にある縄文時代前期に形成された柳崎貝塚では、ヤマトシジミなどの汽水に生息する貝類が確認されている。

那珂川と酒沼川と北上沿岸流のせめぎ合い



図3 大洗層が露出している大洗海岸（南北約1.8km，東西約0.9kmの範囲の岩礁）

出典：大洗観光協会2024

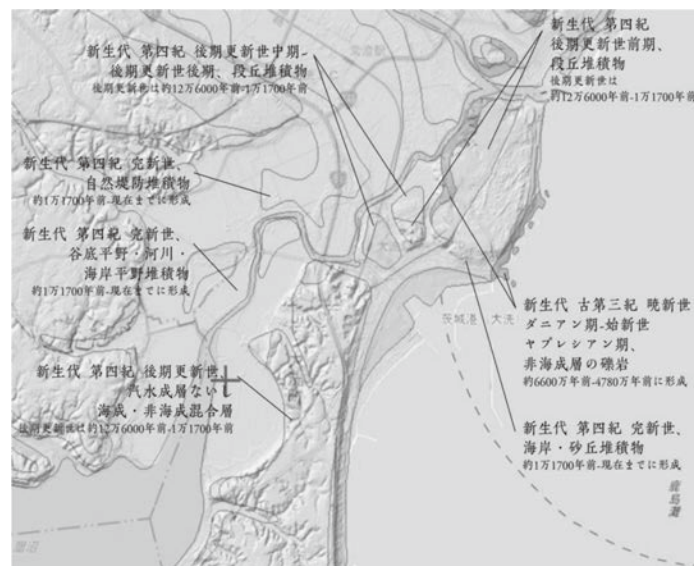


図4 大洗町と周辺の地質（廣瀬俊介2024開運大洗プロジェクト調査計画支援業務報告書31頁より引用）

出典：国立研究開発法人産業総合研究所地質調査総合センター：シームレス地質図 <https://gbank.gsj.jp/geonavi/>，国土地理院：地理院地図 <http://maps.gsi.go.jp/>（廣瀬改変2023）

その後の緩やかな海退によって広大な海岸平野と内湾またはラグーン（潟湖）が残されたと考えられるが，海岸平野を流れる那珂川と涸沼川とその河口に迫る北上沿岸流は互いに土砂運搬をせめぎ合っているため，川の流路や涸沼の形状および河口の位置もたびたび変わり，現在の地形図・地質図に示す状態になっているものと考えられる。

古代では，現在の涸沼川が合流する那珂川河口域で洪水がたびたび起こり，自然堤防と那珂川自体



図5 水戸ー大洗間を走る大洗鹿島線から見る田園

出典：石井盛志2014里海邸公式ブログ

<https://blog.goo.ne.jp/kinparoman/e/a6244a73d04ce53bd0c11fb2e2ddc4c4>

の土砂運搬力によって涸沼川の合流が阻害され，谷口付近（現在の涸沼）に水が溜まり涸沼の湖面が広がった可能性が考えられる。涸沼川がその流出口を那珂川河口とは別の位置の海岸に求めていくとも考えられるが，強い北上沿岸流による海砂が多く，涸沼川の河口は流出口を失いやすい。

このような事情によって，涸沼は涸沼川のせき止め状況が変遷すれば水位の上下が起こり，湖の面積が変化したと考えられる¹⁵⁾。現在の涸沼が古代において，広大なラグーン（潟湖）を形成していたことは，奈良時代に書かれた常陸國風土記や江戸時代に書かれた新編常陸国誌に記述される「阿多可奈湖」の存在からも窺える（3-2-2 大洗町の歴史～風土と観光の形成にて後述）。

d. 大洗町の植生と生物

ここでは主に現在の大洗町の観光資源に関連していると考えられるものを紹介する。

大洗磯前神社の鎮守の森

大洗町周辺は，温帯の中でも暖かな範囲に含まれる気候帯下に属し，それが生物の分布にも反映している。典型的な例は大洗磯前神社の社叢林（図6）で，スタジイ，タブノキ，ヤブツバキなどの暖温帯常緑広葉樹林を構成する木々がほとんど人の手の加えられていない野生の自然に近い状態で繁茂している。大洗磯前神社の歴史とともに永続してきた自然の森は厳かに感じられる。

大洗海岸のクロマツ林

大洗海岸の背後を覆うクロマツ林は，防風・防砂のために江戸時代に植えたものとされ，「森林浴の森日本百選」に選定されている。多くの観光客が大洗を移動する際に，クロマツ林の中を通行するため，大洗らしい風景としてよく知られている¹⁶⁾。

大洗海岸の海岸植物

大洗海岸の砂浜には海浜植物の大きな群落（植物共同体）が見られる。広く群生するハマゴウ（図7）を中心に，ハマヒルガオ，テリハノイバラ，コウボウムギ，ハマエンドウ，ノブドウ，チガヤ，ユッカなどが見られ，後背地に林立するクロマツ林ともに砂浜に生きる植物の豊かさが感じられる。ハマゴウの群生は夏になるとミントのような香りが漂う青い花々を咲かせ，ミツハチが受粉の手伝いをし



図6 大洗磯前神社の社叢林

出典：石井盛志2018年5月19日撮影



図7 大洗海岸のハマゴウ(金澤真里2017私と海 | 「海と踊る」より引用)

出典：「大洗自然と文化アーカイブズ」

<https://oarai-onca.localinfo.jp/posts/2952636?categoryIds=687188>

ている様子が気軽に観察できる。干潮時には岩礁の海藻類も見えるため大洗海岸の風景は岩礁の美しさに生命の豊かさが重なる。しかしながら、重点対策外来種のコマツヨイグサやハマゴウに寄生して景観を荒らす要注意外来生物のアメリカネナシカズラが増えることが懸念されている。

大洗海岸の水生生物

大洗海岸は寒流，暖流，那珂川，涸沼川の水が入り混じり，さらに大洗磯前神社の森や大洗層上部の湧水層から海岸に湧き水が海に流れ出るなど，様々な場所から水が集まる海岸であるため，海岸の生態系の多様性に関わっていると考えられる。大洗海岸の岩礁地帯にはカニ類，ヒトデ類，ムラサキウニ，アメフラシ，シロメバル，スズキ，ムラソイといった魚類など多くの海洋生物が生息している

が(図8), 海藻類はアラメ, カジメ, ヒジキ, ワカメ, アオサ, エビアマモなど国内屈指と言われるほどの多様な海藻があるとされている。

大洗サンビーチの水生生物

大洗サンビーチの砂浜には外洋性のチョウセンハマグリやウババイ(ホッキガイ)などの砂浜を好む貝類の生息域となっており, 春の季節には潮干狩りで賑わう。

涸沼・涸沼川の水生生物

涸沼および涸沼川は汽水域で, スズキ, クロダイ, ボラ, ハゼ, コイ, フナなど海水・淡水・汽水の魚介類が生息している。とりわけヤマトシジミの漁場として知られ, シジミ漁の風景がよく見られる¹⁷⁾。

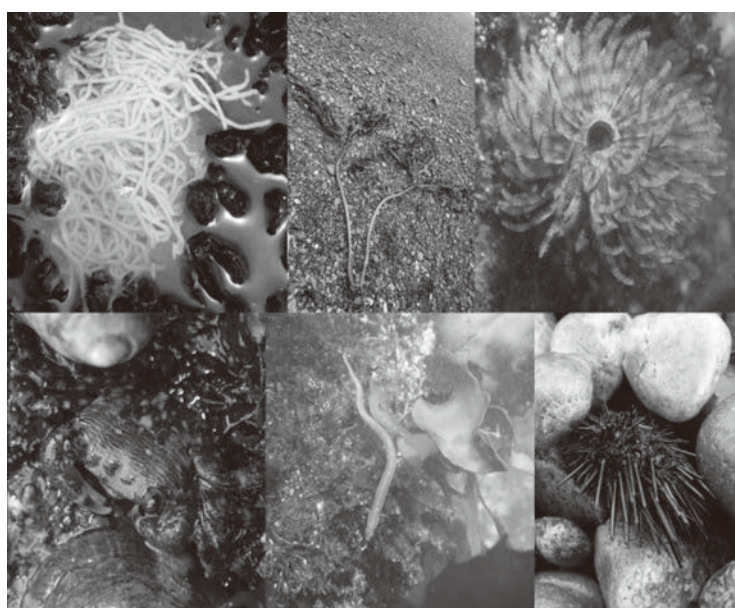


図8 大洗海岸の水生生物(栗原敬太 金澤真里 2023「潮間帯通信 vol2」より引用)

出典: 潮間帯通信社

3-2-2 大洗町の歴史～風土と観光の形成

a. 観光地前史

旧石器～平安時代 キーワード(一本松遺跡群と髭釜遺跡, 磯浜古墳群, 阿多可奈湖, 平津駅家, 大洗磯前神社)

大洗町の遺跡分布

大洗町の遺跡は, 旧石器時代から江戸時代に至る集落跡, 貝塚, 古墳, 城館跡などがあり, 埋蔵文化財包蔵地として町内107カ所におよぶ(図9)。

約1割の遺跡は太平洋を直接臨む台地東縁に営まれているが, 他の遺跡は那珂川・涸沼川に直面する台地上か, 涸沼川に流れ下る小河川に臨む台地周縁に位置している。しかしながら, 大洗ゴルフ倶楽部のゴルフ場内, 日本原子力研究開発機構敷地内や山林内は把握が困難なため, 遺跡の実数はこれ

より多いと考えられる¹⁸⁾。

旧石器時代

大洗町の北端、現在的那珂川沿いの台地上にあるドンドン山遺跡と磐船山遺跡の2遺跡から10点のナイフ形石器等が採集されている¹⁹⁾。

縄文時代

▶縄文時代の自然環境

縄文海進により縄文時代以降の古代では海水面が上昇した。現在の涸沼川より西側では海面上昇により侵入した海水が那珂川・涸沼川水系と入り混じり、内湾あるいはラグーン（潟湖）の汽水環境が形成されていたと考えられ、縄文時代以降の大洗台地は島のような地形になっていた可能性も考えられる。



図9 大洗町の埋蔵文化財包蔵地（大洗町教育委員会2023「史跡 磯浜古墳群保存活用計画」50頁より引用）

出典：大洗町教育委員会

▶縄文時代の暮らし

磯浜町の磯浜古墳群より北に約300 m地点にある白畑貝塚にはヤマトシジミが濃密に分布し、さらに300mほど北東にある縄文中後期の吹上貝塚からはハマグリほか内湾の貝が外洋の貝が共に見つっている。その東の台地上には集落跡である吹上遺跡があり、大洗台地の南の谷（新町池の谷。現在の五反田、和銅のあたり）は内湾あるいはラグーン（潟湖）の汽水環境に接して暮らしが営まれていたと想像される。涸沼川に直面する鹿島台地・夏海台地・大貫台地にある縄文時代の遺跡においても、内水面の汽水環境に沿った暮らしが想像されるが、太平洋沿岸からの貝類の採捕も複数で確認されている。神山町の千天遺跡、成田町のおんだし遺跡には竪穴建物跡や土坑が多数検出されているが、千天遺跡には外海岩礁域に生息する貝類が包含され、遺跡から離れている大洗海岸からの採捕もみられた。大貫台地の大貫池より南東400m地点にある縄文時代後期の大貫落神北・南貝塚では、ハマグリほか内湾の貝とともに現在の大洗サンビーチ海岸に生息するチョウセンハマグリ²⁰⁾の採捕もみられている。

弥生時代～古墳時代 古代のまちづくり

▶弥生時代後期から200年間続く継続集中居住

大洗町北西の涸沼川から長さ600 m～700 mの3本の谷が海側に向けて入る。新町池の谷、掘割の谷、堀川の谷に区画された標高約10mの台地に弥生時代から古墳時代の遺跡が展開している（図10）。磯浜古墳群の北側にある一本松遺跡群とその西側の掘割の谷と堀川の谷の間にある髭釜遺跡では著しい密集率を示す集落が形成され、現在までの部分調査の成果においても320棟を超える建物が確認されている。弥生時代後期前葉から約200年間にわたり集中して継続的に竪穴建物が台地全面に建てられた。

▶出土品からみるラグーン²¹⁾の存在と広域流通ネットワーク

髭釜遺跡の弥生時代後期の竪穴建物跡からは大洗の周辺水域から採捕された様々な貝殻が出土している。大洗海岸などの岩礁に生息するイガイ類、鹿島灘の外洋砂浜に生息するチョウセンハマグリ、涸沼および涸沼川の汽水に生息するヤマトシジミ、現在では生息が確認できないが内湾やラグーン（潟湖）の河口砂泥底に生息のできるハマグリなど、4種類の貝殻が確認された。このように現在でも採捕できる貝類の存在が確認できるほか、ヤマトシジミのほか内湾性のハマグリ²²⁾の存在から弥生時代に内湾やラグーン（潟湖）が存在した可能性を思わせる。このあたりの1～3世紀に営まれた集落からの出土品の多くは在地の弥生土器である。しかしながら一本松遺跡の巴形銅器や団子内遺跡の板状鉄斧などの特別な金属製品が確認されたため、広域に流通するネットワークを持ちながら、集落に集中して住み続けていたようである^{21) 22)}。

▶磯浜古墳群の築造

弥生時代終末期から古墳時代前期初頭、一本松遺跡群の集落を見下ろす台地上に姫塚古墳が築造され、続いて古墳時代前期前半に五本松古墳、五本松下古墳を築造した。古墳時代前期後葉から中期初頭になると古墳は集落から離れ、外洋に面して築造されるようになる。古墳時代前期後葉に坊主山古墳、古墳時代前期末葉に日下ヶ塚（鏡塚）古墳、古墳時代中期初頭に車塚古墳が築造された。古墳の形状は後に築造されるほどに主丘の円の部分が大きくなっている（図11）^{22) 23)}。



図10 磯浜の地形と遺跡の分布（大洗町教育委員会2023「史跡 磯浜古墳群保存活用計画」57頁より引用）

出典：大洗町教育委員会

▶海浜型前方後円墳と海運ネットワーク

磯浜古墳群は独立した400 m四方の島状の台地に立地し、古墳の東は外洋に、西は内水面の海域に面しており、海上から目視可能な交通の要衝に造営されるなどの特徴を持つ前方後円墳を海浜型前方後円墳と呼ぶ。海浜型前方後円墳は日本列島各地で造られ、磯浜古墳群の日下ヶ塚古墳は列島における分布の東限に位置している(図12)。築造された古墳の仕様はヤマト王権と共通性を持つことから、当時の首長がヤマト王権が整備した列島の海運ネットワークに関わっていたと考えられる。同時期の(現在の霞ヶ浦や北浦などの)常陸の内海においても、海浜型前方後円墳が一定の距離を保って築造されていることから、常陸においても海運ネットワークが形成されていたとみられる²⁴⁾。

奈良・平安時代

▶阿多可奈湖（あたかなのみなと）

奈良時代の常陸国風土記には大洗に存在したラグーン（潟湖）を示す「阿多可奈湖」（あたかなのみなど）が那珂郡と香島郡の境にあると記述されている²⁵⁾。阿多可奈湖について新編常陸国誌では、

「阿多可奈湖は蓋涸沼ニテ、寒田ニ對エテ、其水ノヌルメルヲ云ウカ」

出典：大洗町教育委員会



出典：大洗町教育委員会

のように、水が滞留した暖かい湖（湊）であると書かれている²⁶⁾。湖（みなと）は「湊」と同じ意味であり、湊は以下のような意味を持つ。

— 14 —

門」とみえ、元来は海・川・湖などの水の出入り口、または海流・河流や潮の干満などによってそこに形成された入江・内湖・潟・砂州（さす）・砂嘴（さし）などの地形をさしたが、転じてその地形を利用してつくられた港湾をいう。古くは津・泊（とまり）とよばれることが多く、古代末期以降たんなる船着場から都市的要素をもった湊となっていたとみられる²⁷⁾。

阿多可奈湖の具体的な場所は不明である。現在的那珂川河口とは別に存在した涸沼川河口を指していた可能性もある。「阿多可奈＝暖湖（あたたかい湖）」の意味から、現在の涸沼を含んだラグーン（潟湖）と涸沼川（と那珂川河口まで）を含めた広大な砂泥底が広がる水域を総称して阿多可奈湖と呼んだのかもしれない。現在、ラグーン（潟湖）跡は干拓によって田園に変わり、水辺は涸沼と涸沼川として残されている。涸沼や涸沼川は海拔0mの汽水域でしじみ漁が盛んである（図13）。



図13 「涸沼川におけるしじみ漁」

出典：大洗観光協会 2024

▶平津駅家（ひらつのうまや） 水運の拠点の可能性

奈良・平安時代になると、都と地方とが道路網で結ばれた古代律令国家が成立する。茨城県は常陸国に属し、常陸国府（石岡市）を中心に複数の郡に分かれ、中心となる役所の郡衙間に道路網が整備された。大洗町是那賀郡と鹿島郡の境界付近に位置し、そこには常陸国風土記に登場する平津駅家（ひらつのうまや）が存在した（図14）。平津は地名で、駅家とは幹線道路上で30里（約16km）ごとに馬をつなぎとめた陸路の駅のことである。阿多可奈湖の存在が記された時代であり、平津是水運の拠点として水駅の機能が考えられる。常陸国府と繋がりながら、陸奥国にも開けた河川港として重要な位置を占めていたと考えられる。平津駅家の位置は水戸市平戸から桜道の北部、掘割（ほりわり）付近と考えられている。桜道からは平津と同じ7～9世紀代の古代の竪穴建物が数10棟発見され、駅家周辺の集落として機能していた可能性がある²⁸⁾。

▶大洗磯前神社の創建

大洗磯前神社（図15）は平安時代に創建された神社である。祭神の大己貴命と少彦名命は二神で力を合わせて日本の国の礎を作り、医療の神様として信仰されている。社殿は戦国時代に小田氏治の乱で焼失したが、江戸時代に水戸二代藩主徳川光圀公により再興が成され、1730（享保15）年に完成した。平安時代の「日本文徳天皇実録」（850年-858年）に書かれている大洗磯前神社の記述²⁹⁾を

み去った。さらに翌日には、怪石の左右に20余の小石があった。侍坐するがごとくに似て、彩色は常にあらず、あるいは形が沙門（修行僧）の像のようであり、ただし耳や目がない。時に神が人に憑いて言う。「我は大奈母知命と少比古奈命なり。昔、この国を造り終えて東の海に往き去ったが、今、民を救済する為に更にまた帰って来た」

857（天安元）年8月7日に常陸國の大洗磯前と酒列磯前は官社に列せられて、10月15日に2つの神社は薬師菩薩明神の神号を受けた。平安時代の日本は天然痘や飢饉が発生し、多くの人々が亡くなっている。疫病は神の祟りという思想から国は読経や祈祷、奉幣（国から供物をいただくこと）、造仏を行うことを疫病対策と考えていた時代であった。大洗磯前神社も創建から1年を待たずに官社に列せられた。当時は神仏習合の時代であり「薬師菩薩」の神号を受けて医薬の神となった。また大洗磯前神社は創建の物語が磯に神が降臨する物語であることから、漁師からの信仰が強く、大洗磯前神社は豊漁の神、航海安全の神としても崇敬される。

▶古代の地名について

「日本文徳天皇実録」に現在の町名になっている「大洗」の名がはじめて出現した。意味は不明であるが、岩礁に波が打ち点ける荒々しい波の様子や「大きく洗う」との言葉から強い清浄性を感じる地名である。大洗町の古代の地名は常陸国風土記に書かれた「平津」「阿多可奈湖」、倭名類聚鈔に書かれた「宮田」「大屋」、そして日本文徳天皇実録に書かれた「大洗」である。

これらの地名が出現した年代は異なるが、土地の様子を想像させるものであり、例えば「平津」と「大洗」は水辺空間の環境の違いが想像させられる。阿多可奈湖（砂泥底が浅く広がる温かなラグーン）の穏やかな内水面に接する湊の社会を想像させる「平津」の名と、外洋の荒波が打ち付ける「大洗磯前」の名が対照を成すと解釈できることから、古代の大洗地方の社会や文化が想像される。そして「磯前」とは何であろうか。次項で紹介する。

▶磯浜古墳群と大洗磯前（大洗岬）

冬至の日の出時刻、磯浜古墳群・日下ヶ塚古墳の首長が葬られた後円部のでっぺんに立つと、日の出の方向は現在の大洗漁港新堤防の折れる位置に重なる（図16、図17）。この地点は昭和時代半ばまでは大洗岬、かつては大洗埼と呼ばれていた岩礁の先端部で、外洋航海のランドマークである。大洗磯前神社の「磯前」（いそさき）は御崎（ミサキ）の先端を指す古い言葉で、日本文徳天皇実録では「大洗磯前」に神が降臨すると書かれているが、それは大洗岬の先端のことであるとされる。

磯浜古墳群の築造は4世紀代で、大洗磯前神社の創建よりもはるかに古い時代である。那珂川・涸沼川河口部の内水面世界を背景に、外洋に開けた水上交通を掌握した地域首長が葬られる際、陸と海との境界に位置する御崎や太陽を特別視する意識を持ち、冬至に太陽が大洗岬に昇る位置を選択して墓を造ったとすれば、太平洋を見下ろす古墳の実像を理解できるかもしれない。これまで整理してきたように、大洗は現在の涸沼川沿岸の内水面を起点にまちづくりが進み、海浜型前方後円墳の築造はヤマト王権のもとで、水上交通の要衝として国内広域水上交通のネットワークに関わってきた可能性を示している。水上交通の発達にともない大洗岬に対する海洋信仰が高まっていったのではないかと考えられる³⁰⁾。

大洗の観光前史とその風土（中間まとめ）

古代大洗は、地学的に水の恩恵もあれば翻弄されるという陰陽を象徴するような地域である。漁業



図16 日下ヶ塚古墳の後円部から見た大洗岬（広報おおあらい2022「大洗町の歴史を見つめて104」日の出の聖地 から引用）

出典：広報おおあらい2022



図17 磯浜古墳群と大洗岬の位置関係（大洗町教育委員会2023「史跡磯浜古墳群保存活用計画」55頁 図2-15 磯浜古墳群と周辺の遺跡等 より引用）

出典：大洗町教育委員会

も農業も恵みを感じながら洪水や津波などの深刻な被害も受けたであろう。そのような風土から逞しさや連帯、地域社会思想が必要とされ継承されてきたと想像もできる。

生活する人間の精神の均衡を支えているのは、外洋に面した岩礁群に打ち寄せる荘厳な波や潮風であり、水平線から昇る曙光であることは、現代でも海に住めば実感できる。地名を「大洗」とは的を得た名称であり、荒波は荒れた心を洗い流し、穢れを祓う。古代においても、大洗の海は食糧源だけでない、そのような本質的な体験価値はすでに住民に受容されていたのではないか。

例えば、神社創建の由緒は「光り輝く僧形の石」が神として大洗岬に降臨し、民を救うために来たと告げる物語である。その文章は大洗の自然や風土がよく反映されているので、その土地の人間が書

いたのではない。齊衡3年12月29日に神社創建の由緒を国に伝え、翌年10月15日に国から医薬の神として薬師菩薩名神の神号を受け、大洗の風土に即した聖地形成に最上の対応を受けている。こうして大洗の地元の人々が感じている海の価値体験が大洗磯前神社の由緒に結晶化されているのである。

また、海浜型前方後円墳の存在が示すように、大洗は経済地理学あるいは地政学的なネットワークの要衝であるから、様々な人々が訪れたはずである。広大な田園を走る馬の上から、あるいは川や海の船上から、コントラストが豊かな大洗の風景に出会う。地域の外の人が大洗を特別視するのは不自然なことではないし、大洗の聖地性が広く伝聞された可能性がある。こうして大洗の地域価値が広域の地域社会に伝わり、大洗磯前神社の創建にも寄与したのかもしれない。

このように古代の大洗は汽水域の地学的優位性と劣位性から風土が育まれ、親水空間の魅力と自然災害の脅威を合わせ持つ暮らしを営みながら、海洋交易や集落の内外の人々が交流する要衝としてまちづくりが進み、コミュニケーションの力が育まれ、大洗の地域価値も外部に伝播された。平安時代には大洗の風土が結晶化された大洗磯前神社が創建され、薬師菩薩明神という破格の社格を受けた。その後延喜式神名帳ではさらに高位の名神大社の社格を受けた。ここまでが大洗の観光の夜明け前である。

b. 観光文化黎明期

室町～江戸時代 キーワード（漁村形成、潮湯治、徳川光圀、大洗磯前神社の再興）

居住地が海浜地域に広がり、磯浜村が誕生。観光文化が確認される

▶木下（けおろし）那珂川涸沼水系の舟運の基点

1526（室町時代大永6）年の「亀山村不動堂勧進疏」には、鹿島神宮や大洗磯前神社の修理に際し、「材を取る船が木下（けおろし）の岸に着く」とあり、大貫町の涸沼川沿岸の木下に社殿の建材が集積された記録が残っている。木下は古代の平津と近く、涸沼水系と外洋の間隔が最も狭くなる地点である。那珂川涸沼水系の河口部の舟運の基点として木下が機能していたと考えられる。木下の存在は、江戸時代に徳川光圀の隠居後に度々大洗を訪れた記録が書かれた「日乗上人日記」に登場する³¹⁾。

▶小田氏治の乱で大洗磯前神社を焼失

大洗磯前神社は、延喜式神名帳（平安時代の神社名鑑）で靈験あらたかな神社を表す「名神大社」に列せられ、中世においては末社40余、社領1千石を下らず祭祀も豊かに行われていた。しかし、永禄年間（1558年～1569年）の小田氏治の乱による兵火で焼失、社領を失った。わずかに100分の1を残した祠を海浜に構え、イササカ祭に供するのみであったという³²⁾。

▶宮田郷から磯浜村へ

江戸時代になって宮田村は磯浜村に改称された。磯浜村の名称の由来は居住地が海辺地帯に形成されたことによる。その時期については諸説あるが、すでに古代より髭釜から大貫にかけて製塩業が営まれており、海岸に居住はあったとされる。しかし、町屋集の集落の形成は1593（文祿2）年と伝えられる。正式に磯浜村が改称されたのは1676（延宝4）年の延宝房総沖地震（M8-M8.34）の大津波（5m-6mの推定波高）で家320軒が流出する災害から復興できた1679（延宝7）年という³³⁾。

▶大洗磯前神社の再興

社殿は前述の通り、戦国時代に小田氏治の乱で焼失したが、1690（元禄3）年、水戸二代藩主・

徳川光圀は社寺改革を推し進め，古社名刹の維持復興に努めていた³⁴⁾。その一環として式内社（延喜式神名帳に登録の神社）であり，由緒のある大洗磯前神社の復興を思い立ち，元禄年間（1688～1704）の初頭に大洗海岸の低い場所から，大洗山の中腹に五尺四方の本殿のほか拝殿や前殿を建てて，遷宮を執り行った。その後，拝殿と本殿は四代藩主・徳川宗堯によって享保年間（1716～1736）に現在の社殿のある場所に建築された。鮮やかな彫刻のある拝殿や素朴な茅葺きの本殿（図18）は現在でも見られる³⁵⁾。



図18 大洗磯前神社本殿

出典：大洗観光協会2024

▶「日乗上人日記」に見る，徳川光圀の大洗行楽

江戸時代，大洗は水戸藩に属し，藩主であった徳川光圀は隠居後に大洗を訪れてレジャーを楽しんでいたことが「日乗上人日記」で紹介されている。この日記は水戸藩に招かれた日蓮宗僧侶・日乗が，隠居後の光圀の暮らしを数年間にわたり記録したものである。隠居後の光圀は，現在のひたちなか市の湊中央にある水戸藩主別荘の湊御殿（賓客閣）を度々訪れている。湊御殿を基点に願入寺に通い，祝町を振興し，大洗地域で広く四季の行楽に興じた。沖洲にて地曳網漁，大洗で海士の潜水漁観覧，磯浜での潮干狩りや地曳網，涸沼川の木下（けおろし）や広浦で舟遊びなど豊富な余暇活動記録が残っている³⁶⁾。2024（令和6）年に大洗観光協会は，大洗海岸の風景を思わせる徳川光圀の和歌「磯月」を刻字した歌碑（図19）を神磯の鳥居近傍の海岸に設置した。徳川光圀が大洗磯前神社の再興をしたことや元禄時代に大洗の親水空間で行楽を楽しんでいたことも歌碑に刻んだ。現在，大洗の各地で

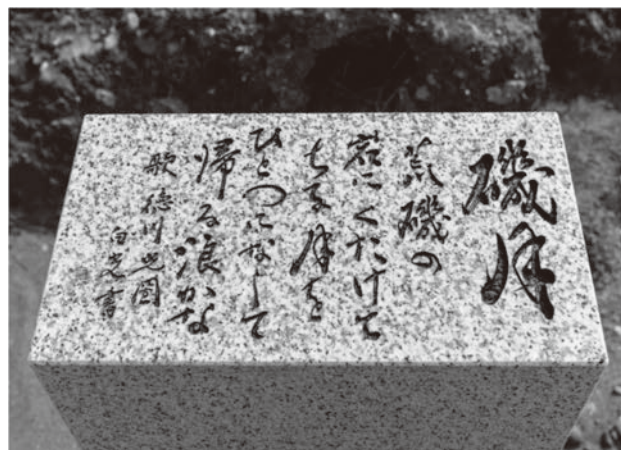


図19 徳川光圀「磯月」歌碑

出典：大洗観光協会

観光をした最古の記録が残っている著名人は徳川光圀である。

▶常陸国の潮湯治について

1902（明治35）年の『常陸の海水浴』には「常陸海水浴起源」の項目で次のように書かれている。

「当国の海水浴は全く煙草耕作者の創むる所に係り、煙草と海水とが自然に奇なる関係を有するに起因せるものの如し、元禄年中那珂、久慈二郡の山中を始め、下野那須野郡なる馬頭烏山等の各地は、煙草の栽培次第に盛んに赴き、土地の住民等は夏秋の交、煙草の茂生せる畦畑の間、青葉を掻き分けて害虫を除き、若しくは雑草を掃う等の力役に服するが為、煙脂自づと身体に付着浸染し、盛夏の交に至り青痘病を発するの恐れあるを以て、脂毒を防ぐには海水浴を以て洗滌するに若く無し」

このように、煙草栽培で身体に付着した脂毒による病気を防ぐために海水浴が行われたと紹介されている。当時の海水浴は、明治中期以降の近代海水浴の行われる冷水浴とは異なり、海水を沸かした潮湯に浸かるものであった。

「隣閭互に伴を結び、米麦味噌等の糧食を背負ひつつ、那珂の平磯、多賀の河原子等に来り漁家細民の居宅を借り受け、互に自炊して入浴するを年々の例と為したるが如し、其浴法たる、近來の如く直に海中に入りて冷浴するにあらず、海水を汲み来りて之を風呂桶に充たし、温熱を加へて潮湯と為し、然る後浴を取り名づけて潮湯浴と称す」

「煙草の産地たる常野両国の山間僻地に居住する農民が最も耕作法に手数を辛苦とを要する煙草を耕作し、周歲煌々役々として畦畑の中に労働するに於ては、盛夏炎暑の交自然身神に疲労を感じべきは、人生生理上に於て当然とする所、然るに長日閑暇に向ふの時を待ちて山間を出て、飄然として海辺に来り海上万里の清風に嘯き、新鮮の空気を呼吸して、魚貝の鮮肉を味ひ海浜の明媚なる風光を探り、繁雜なる業務も無く終日随意に行住坐臥しつつ、朝夕浴を取りて身体を清潔にし、三伏苦熱の嘆き忘れて数十日の樂を求むるに於ては、これ実に最上の衛生法にして、健康を保つ上に於い効驗大なるべきは、何人といえども疑いを存せざる所、其の煙草耕作者が潮湯治のために受け得たる効能や、けだしすこぶる多大なものありしなるべし」

と潮湯治の意義について解説をしている。近代海水浴を導入した明治時代中期に書かれた本のため、著者の独自解釈であるかもしれないが、観光資源を楽しむ保養逗留を書いている³⁷⁾。

▶大洗における潮湯治

大洗における潮湯治に関する古い記録は、江戸時代「水戸下市御用留（一）」1757（宝暦七）年における磯浜村西福寺での潮湯治である³⁸⁾。新編常陸国誌には、戦国時代の1532（天文元）年8月に、水戸の江戸但馬守によって潮湯治で磯浜に来た小幡中務が大洗明神下で討ち取られたとの伝説が紹介されている³⁹⁾。大洗における潮湯治は戦後までホテル（図20）や旅館でみられたが、現在は存在しない。

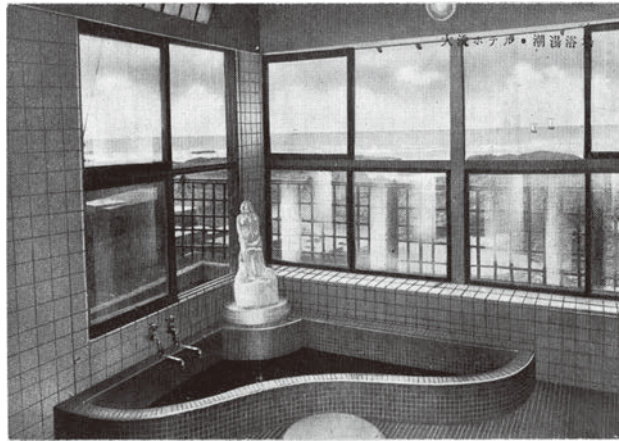


図20 戦後の観光絵葉書『大洗ホテル・潮湯浴場』

出典：蓼沼香未由（個人所有）

c. 観光産業黎明期

明治時代～終戦 キーワード（近代海水浴、水濱電車、宮下旅館街、宮内庁御料地）

近代海水浴による海浜地の観光産業化

日本には古来より、潮湯治という療養のための温浴文化があったが、明治時代の文明開化の潮流の中で西洋医学の見地から病氣治療・療養・保養のために海水浴場が開設される。この時期の海水浴は海水に浸かり冷浴を行うものであった。これが後に、国民的レジャーに変化して定着したのが現在の海水浴である。本稿はこれを便宜上、戦前における海水浴を「近代海水浴」と呼ぶ。その後、海水浴場に向かう鉄道がつくられ、鉄道利用客が増えるように海水浴客が安価に宿泊できる大衆的な旅館やホテルが建てられ、海水浴は当初の医学的性格と長期滞在型であったものが、次第に大衆向けのレジャーに変化した。

▶大洗地方における近代海水浴の導入、宮下旅館街が形成され、保養地になる

明治20年台初頭、磯浜村の大洗磯前神社下（宮下）の海岸に大洗海水浴場が開設された。この時、大洗海岸は宮内省御料地になった。大洗では海水浴場の開設にあわせるように、1889（明治22）年に水戸鉄道が小山－水戸間で開業した。水戸から蒸気船にて那珂川を下り、祝町を経由して大洗海水浴場を訪れることが可能になり、水戸－祝町間を結ぶ那珂川汽船を経営していた地方事業家の石井藤助は大洗海岸に長期滞在型の旅館「金波楼」を創業した。

その後まもなく大洗海岸に金波楼別邸を3軒ほど開業し、すでに江戸時代から営まれていた魚来庵、小林楼などとともに宮下旅館街が形成された。高橋信行の「大洗海水浴場誌」⁴⁰⁾によれば、大洗の宿泊施設は潮湯治と海水浴を合わせ持つ業態として紹介されている。つまり、海水による冷浴と宿での温浴もできる宿泊施設である。

▶明治28年の「大洗海水浴場誌」で紹介されている大洗海岸の環境優位性

「大洗海水浴場誌」では大洗海岸の風土特徴・環境優位性が書かれており、以下に抜粋する。

【地形・地質的特徴】

・大洗は海に突出した岬角で市街と隔絶され、埃塵や煮汁の悪臭なく、空気が清潔である。



図21 海水浴旅館金波楼と3軒の別邸 1893（明治26）
出典：里海邸 金波楼本邸

- ・大洗は東南に海を面して、西北に高い丘（大洗山）を背に持ち、早春は少し寒いが西北風を防ぎ、冬は温暖で、夏は清涼である。
- ・大洗山より湧出する泉水があり、有機物を含まず極めて清潔である。
- ・土地は海岸に向かって徐々に傾斜し、汚水が貯留することなく、水の滲出が容易である。
- ・海中に巨大な巖が突出して激しい波を防ぎ、さざ波を好むのも自由自在である。
- ・岩場の潮溜まりで天然温浴が出来、真夏の日中においてその湯温は37.7℃以上に昇る。

【気候・海洋的特徴】

- ・潮流は黒潮の流れが銚子港を経て来るため、冬季は極めて温暖にして微温浴の感がある。
- ・風は2月下旬から4月中旬においてイナサと称する東南風が午後2時までやや強く、寒い事もある。但し、午前は通常無風でとりわけ温暖である。
- ・雨量は年内を平均すれば量は多くない（日本の上総より北海道に至る東海岸において最も少量である）が、陰暦2月ないし8月において最も多い。雪は極めて少ないか全く無い。年に1, 2回の雪が降るぐらいで降り積もるほどではない。

このように大洗海岸の風土特徴がまとめられている。大洗は山間地のように日光を遮らず、都市部の浴場のように塵埃や飲料水の不衛生もなく、熱海や大磯と同じく有名であり、当時の大学や諸名医による肺結核および他慢性患者の転地療場の指定先として「大磯にあらざれば大洗である」と評価されており、気候療法の条件を完備しているとして紹介されている。また「大洗海水浴場誌」を、1980（昭和55）年5月1日の「広報おおあらい」において、大洗町史編さん委員の江原忠治氏が現代文でわかりやすく紹介しているので、その内容を一部紹介する。

【海水のききめ】

「各旅館では、温浴のために海水と真水の二つの風呂を用意しているので、各自浴場医師（旅館指定の医師）の指示により、その体力に応じて、冷浴（海水浴）と組みあわせて利用すべきである」

【海水浴の適応症】

「海水浴は、保養・予防そして治療の三分野に適する。海岸での保養の必要な者は、都会にあって不潔なる空气中に生活する者、運動不十分なる職業をとる者、激務ある官吏、事務繁多なる会社員、日課に苦しむ学生とある。これは、現代においては日本人全体が該当する。なお、今は考えられないものに深窓裡の婦女（俗世間に染まっていない婦女）とある（予防の説明は省略）」

【海水浴の心得】

「（冒頭省略）海水浴に現在以上の温泉や薬風呂のような効果を考えていたようだ。現在は観光的側面だけが強調されているが、このような明治時代を見直し、大洗の地理的条件を最大限に生かしてはどうだろうか」とある。

【旅館と宿泊料】

「海水浴のための旅館は、大洗と磯浜と大貫の3カ所にあった。記録されているのは、大洗では魚来庵、金波楼、小林楼、木根屋、風月楼そして金波楼別荘で、（中略）磯浜には肴屋、滑川屋、豊後屋があり、大貫には角屋、大丸藤屋、日野屋などがあった。（中略）これら宿泊料も、室内からの遠望の程度によって料金に差があり、町の中の宿泊料は安かったという。なお、長期滞在者のためには、自炊や座敷借り切りという格安の湯治方法もあった」

▶明治時代の茨城県海浜観光ガイドにおいて、磯濱そして大洗は最も評価されている

1902（明治35）年に滝興治が書いた「常陸の海水浴」は、茨城県の海水浴場を南から北まで「鹿島の易なる」「三濱の奇なる」「多賀の壮なる」と三海浜のエリアに分けて特徴付けている海水浴場ガイドブックである。「鹿島」は犬吠埼の北より大貫までを指し、「三濱」とは磯濱より久慈濱までを指し、「多賀」は河原子より平潟港に至る海浜地域として整理している。この三海浜の中で最も人気があると紹介されているのが「三濱」である。その理由は、磯濱から久慈濱に至るまでの岩礁の風光に涼味があり、茨城県内の海浜地域では最も市街化されており、水陸の物産が豊かであることなどが挙げられている。特に「三濱」の南端に位置する磯濱は戸数2500、人口12000余、物産豊穡にして商業盛んに営まれ、常陸東海の最も繁華な市街地と紹介されており、そして磯濱の中で大洗地区は山水の景勝を占める別天地とされ、仙境の趣きがあると書かれている⁴¹⁾。

▶磯浜港計画と中断、磯浜海水浴場、水濱電車の開通

大洗は江戸時代から漁業を生業とし、涸沼川河口は海上運搬の寄港地として利用されていたが、河口の水深確保が困難となり、明治時代の終わりから大正時代初めに、現在の大洗港のあたりに磯浜港を計画した。1910（明治43）年に磯浜町において、磯浜港築港のための工事が着工されたが、1919（大正8）年に台風による漂砂の堆積により中止され、結果として港ではなく「磯浜海水浴場」として利用されることとなった。1922（大正11）年12月には水濱電車（水戸の浜田－磯浜）が開通したことで海水浴客の増加につながった。1926（大正15）年には磯浜－祝町間が開通し、この時に開業した磯浜海水浴場の最寄り駅である曲松駅は、夏季には水戸市方面からの海水浴客で混雑していた⁴²⁾。

d. 観光地導入期

戦後～昭和36年 キーワード（自然公園の指定、都市公園の指定、磯節、大洗水族館、大洗ゴルフ倶楽部）

大洗町の誕生、大洗町に自然公園を指定し、観光地導入へ

▶旅館経営者らが観光協会を設立。磯節キャラバン隊による宣伝

終戦後から数年間は観光に訪れるものは僅かで、ほとんどは日帰り客であった。旅館の利用者が低迷したため、旅館業者による広域的な宣伝活動が開始された。まず1946(昭和21)～47(昭和22)年に、金波楼、那珂川楼、おかめ旅館の3軒が水戸駅前の焼跡に大きな看板を立てた。1949(昭和24)～50(昭和25)年頃には観光協会が設立され、彼らが率いる磯節キャラバン隊による宣伝が始まった⁴³⁾。

磯節は大洗町において唄い継がれている民謡で日本三大民謡の1つと称され、起源は江戸時代到大洗周辺の漁師が口ずさんだ舟唄であるとされている。

▶大洗県立自然公園と県営都市公園（大洗公園）に指定される

茨城県は1951(昭和26)年、自然環境の保護と快適で適正な利用を目的とする大洗県立自然公園を指定し、公園地域内である大洗海岸沿いに大洗水族館を建設し、1952(昭和27)年に開業した。1953(昭和28)年には同じく県立自然公園内の県有地および町有地において大洗ゴルフ倶楽部が開業し、海水浴以外の新たな観光目的が加わった。1954(昭和29)年には磯浜町と大貫町が合併し大洗町が誕生。翌年には鹿島郡旭村の一部(旧夏海村の神山と成田の一部)を編入。1957(昭和32)年には大洗岬以北の大洗海岸を県営都市公園(大洗公園・風致公園)に指定した⁴³⁾。風致公園は風致(自然の風景などのおもむき、味わい)の享受の用に供することを目的とする都市公園であり、樹林地、湖沼海浜等の良好な自然的環境を形成する土地を選定し、配置されたものをいう。

▶海水浴場、宿泊施設、鉄道駅の近接性による、海水浴人気

レジャーの通年化が図られたとはいえ観光の中心は海水浴であり、1950年代の大洗町における海水浴客数は年間250万人に及んだ。

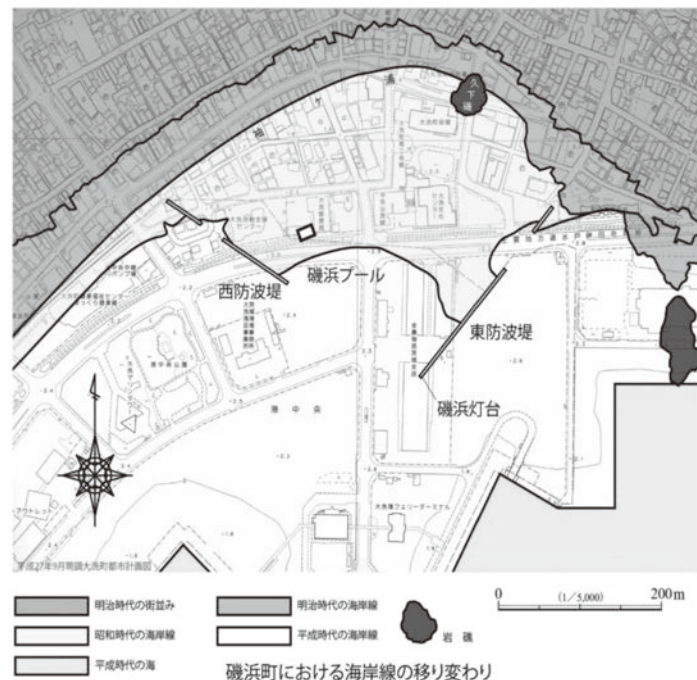


図22 磯浜の海岸線の変化

出典：大洗町教育委員会生涯学習課 ノスタルジー大洗写真展2018

関連事業「懐かしの磯浜築港を探ろう！」配布資料

当時の大洗町には「磯浜海水浴場」「大貫海水浴場」「大洗海水浴場」の3つがあったが、磯浜築港の結果生まれた磯浜海水浴場（図22・磯浜プール）は砂浜が市街地に隣接するほど近いため、市街地を集積する民宿から水着のまま磯浜海水浴場に行くことができた。曲松地区などの夏の商店街は海水浴客の歩く姿が日常の風景であった。水戸からの水濱電車で磯浜海水浴場の最寄り駅である曲松駅で降車して海水浴場を訪れる者も多かった。このように磯浜市街地において形成された海水浴場、宿泊施設、鉄道駅の近接性によって、磯浜海水浴場はもとより、大洗町全体の海水浴場に多くの人々が惹きつけられることになった⁴⁵⁾。

▶大洗海岸に「神磯の鳥居」が建てられる

1959(昭和34)年に大洗磯前神社ご鎮座1100年の記念事業として、岩礁上に石の鳥居が建立される。これ以降、神磯の鳥居は大洗町を象徴するブランドアイコンとして認知されていく。



図23 神磯の鳥居 筆者撮影 2023年

e. 観光開発期

昭和36～昭和60年 キーワード（重要港湾指定、交通アクセス拡充、漁港、フェリー、大洗サンビーチ、潮干狩り）

重要流通港湾拠点として、観光インフラが形成される

現在の大洗町の海岸線のかたちは大洗港の整備によってできた。大洗港の整備計画は首都圏の人口急増に伴い、東京湾への貨物の流れが過密化する中で、北関東の開発を促進して首都圏集中を緩和していく国の政策の一環として計画され、茨城県の広域的流通港湾群の造成構想が立てられて始まった⁴⁶⁾。

▶第1段階 大洗港の整備 漁港区（大洗漁港）の整備（1961年～1979年）

昭和30年代に新たな港湾建設の機運が高まり、1958(昭和33)年12月の地方港湾指定を機に港名を磯浜港から大洗港に改めて、1961(昭和36)年度より港湾建設を開始。第1埠頭、第2埠頭の完成を経て、1979(昭和54)年度までに漁港区が出来上がった⁴⁷⁾（着工前の海岸線は図24の左）。

▶第2段階 大洗港の整備 フェリー港（第3埠頭）の整備と就航開始（1979年～85年）

1979(昭和54)年に大洗港は重要港湾に指定され、大洗港は単なる漁港のみの利用だけでなく「流

通港湾」として利用できるよう要望を受けた⁴⁶⁾。大洗港は北関東の開発および流通拠点港湾の候補地として、長距離カーフェリーの寄港を前提とした港湾計画が策定され、第3埠頭(船の喫水8メートル)の整備に着手、1985(昭和60)年3月には大洗～苫小牧・室蘭両港間にカーフェリーが就航した⁴⁷⁾(第3埠頭までの整備完了の海岸線は、図24の右)。磯浜港の建設中断から60年の時を経て漁港が完成した。第1埠頭から第3埠頭の整備で磯浜海水浴場は消滅し、商店街・市街地から海岸線は遠くなったが、流通港湾として第3埠頭が大洗港が整備されフェリーが就航されるとともに、大洗町をとりまく交通網も大きな変化を遂げた。1966(昭和41)年に水濱電車が廃線となったが、1985(昭和60)年に鹿島臨海鉄道大洗鹿島線が開通、1984(昭和59)年の常磐道千代田石岡－那珂インターチェンジ間が開通され、大洗町は東京からのアクセスが容易になり、その後も高速道路の整備はさらに進んだ⁴⁶⁾。



図24 大洗港建設による海岸線の変化 1961年-1969年頃(左), 1984年-1986年頃(右)

出典：国土地理院：地理院地図 年代別の写真 <http://maps.gsi.go.jp/>

▶大洗サンビーチの供用開始

大洗港の防波堤の影響から南の海岸に砂が集まり、広大なビーチが形成された。これを1984(昭和59)年に大洗サンビーチ海水浴場(図25)としてオープンし、初年度から夏の海水浴客は100万人の人々で賑わったという⁴⁸⁾。その広大で平らな砂浜環境は拡大を続け、安全で快適なモデルビーチを理念に掲げたバリアフリービーチが誕生することになり、大洗町の新時代を象徴するビーチとして大きな観光資源になっていく。遠浅の浜辺であるため、春の潮干狩りは大人気である。



図25 大洗サンビーチ

出典：大洗観光協会2010年7月18日撮影

f. 観光再編期

昭和60～平成23年 キーワード（海水浴場→海洋性リゾート, あんこう鍋, ユニバーサルビーチ, サーフィン）

海水浴場の町から, 海洋性リゾート（みなとオアシス）に転換へ

▶国内全体で海水浴客数の長期低落

バブル崩壊以降, 国内レジャーの多様化や少子化を背景に全国の海水浴客は激減した。茨城県全体で海水浴客は長期低落が続いている。2010年の茨城県全体の海水浴場入込客数は1999年の半分以下である。2011年3月の東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響で大洗町の海水浴客も急減した。2013年度までに年々回復しているが, 震災以前の入込客数には戻っていない⁴⁹⁾。

▶大洗町における海水浴客数の長期低落

大洗町の海水浴客は大洗サンビーチがオープンした1984（昭和49）年に, 280万人⁴⁸⁾ 超えとなっているが, 東日本大震災前の2010（平成22）年で65万人となっている⁵⁰⁾。さらに, 新型コロナウイルス感染症の流行前の2019（令和元）年の海水浴客数は19万人と, 1984年から2019年までの35年間で93%の減少となっている⁵¹⁾。

▶海水浴客減少の一方, 大洗港区の観光開発で年間観光客は増える

このように大洗町においても, 全国的な傾向と同じく海水浴客が大幅に減少したが, 大洗港区を中心に観光施設の開業が相次ぎ, 観光客数は増加した。1992年に大洗マリーナ, 1999年にゆっくら健康館, 2001年に大洗わくわく科学館, 2004年に大洗海・山直売センターいきいき, 2006年に大洗リゾートアウトレット, 2009年にめんたいパーク大洗, 2010年に大洗町漁協かあちゃんの店が大洗港区に開業している。また, 大洗公園では2002年にアクアワールド茨城県大洗水族館がリニューアルした。東日本大震災が起こるまで大洗町の年間観光客数は5年連続で550万人を超えた。（大震災以降は新型コロナウイルス感染の経済への影響が大きな時期を除き, 400万人台を維持している⁵²⁾。

▶首都圏初の「みなとオアシス」に認定

みなとオアシスとは, 海浜・旅客ターミナル・広場などの港の施設やスペースのうち, 国が一定の要件を満たす施設を認定・登録し, 広報活動を支援する制度である。茨城港大洗港区は, 北海道へのフェリーの玄関港であり, マリーナやマリントワー等が整備され, 物流・交流拠点としての機能も高まり, 隣接する大洗サンビーチではサーフィンやビーチバレー等のマリンスポーツの拠点として知られる。大洗港区の施設や大洗サンビーチの有効利用を図り, にぎわい・交流拠点としてのウォーターフロントを目指す大洗町は, 2008（平成20）年12月に首都圏初の「みなとオアシス」に認定・登録された。

- ・みなとオアシス認定施設 大洗マリントワー
- ・みなとオアシス関連施設 大洗サンビーチ, 大洗海浜公園, 大洗マリーナ
フェリーターミナル, 大洗わくわく科学館
大洗シーサイドステーション, 第4埠頭

▶北関東各県から大洗町へのアクセスが向上

1996（平成8）年に東水戸道路が開通し、2000（平成12）年に大洗町の最寄りICである水戸大洗ICと常磐道が結ばれた。2008（平成20）年には北関東自動車道の茨城県－栃木県間が、2011（平成23）年に茨城県－群馬県間がそれぞれ開通した。以上のように観光再編期においては海水浴客が減少傾向にある一方で、観光目的が増加してきた。また宿泊者数が減少し、日帰りの観光行動が進展してきた⁵³⁾。

▶サーフィンの聖地 大洗へ

大洗サンビーチでは、海水浴の減少傾向と入れ替わるように、サーフィンや潮干狩りなどのレジャーは盛況になっていく。大洗最初のサーフショップWedgeは1987（昭和62）年の開店から38年の歴史がある⁵⁴⁾。大洗には特徴の異なる2つのサーフスポットがある。大洗港建設にともなう漂砂で形成された大洗サンビーチは遠浅のビーチとして、子どもや初心者～上級者まで幅広いレベルのサーファーが楽しめるポイントとして知られる。大型の駐車場も整備され茨城県で最もメジャーなサーフスポットに発達した。もうひとつの大洗海岸磯場ポイントは、例年日本プロサーフィン連盟（JPSA）のプロサーフィンツアーの一戦が開催される。2005（平成17）年には茨城サーフユニオンが主催するサーフシンポジウムが開催された。サーファーと地域との生活交流の促進を図ること、若者文化のサーフィンが幅広い世代のサーフィンに拡大すること、サーフ環境の維持と自然保護、体験観光との連携を図ることなど、幅広いテーマでサーフィンによるまちづくりが議論された⁵⁵⁾。



図26 大洗サンビーチでのサーフィン

出典：大洗観光協会

▶大洗サーフ・ライフセービング・クラブによるユニバーサル・ビーチの推進

大洗サーフ・ライフセービング・クラブ（以下、大洗SLSC）は1993（平成5）年にライフセーバーの足立正俊氏により大洗町で設立された。大洗サンビーチを拠点に学生からシニアまで様々な立場の会員が集い、スポーツやパトロールだけのクラブを超えた、広く社会に開かれたクラブである⁵⁶⁾。

社会貢献を考え発展する組織として歩み、1997（平成9）年には全国に先駆けて「バリアフリー・ビーチ」を導入した。低圧バルーンタイヤを持つランディーズ（水陸両用車椅子）の導入により、砂浜や波打ち際など、通常の手椅子では移動しにくい海水浴場の環境を多くの方々に楽しんでもらえるビーチ体験の提供を開始した。夏季シーズンの水陸両用車貸出は会員制となっており、2024（令和6）年時点で会員数は1600人を超えた。障害者専用の駐車場や更衣室の設置などの試行錯誤を重ねたバリアフリービーチの運営を通じて、利用者と運営者のコミュニケーションの重要性を感じ、明るい



図27 大洗SLSCのユニバーサルビーチ活動

出典：大洗SLSC

挨拶からはじまる多様な利用者との「心の共有」を目指す「ユニバーサルビーチ」に理念を昇華させて、ビーチフラダンス等を「共に楽しむ」ユニバーサルキャンペーンの取り組みを開始。「すべての人が一緒に楽しむ」コミュニケーションができるビーチ文化の醸成に努めている（図27）。このような社会活動が認められ、2003（平成15）年に「水辺のユニバーサルデザイン大賞」大賞を受賞。2007（平成19）年には「内閣府バリアフリー化推進功労者奨励賞」を受賞した。

2022（令和4）年からは大洗町内の全ての障害者を対象とした〈障害者とライフセーバー合同組織〉「ユニバーサルサロン安康（あんこう）」を設立。障害者も健常者も垣根なく楽しいひと時を過ごせるサロンを目指し、月1回の活動を通年にわたり実施している。大洗町の全ての小学校ではジュニア・ライフセービング教室を開催。大洗の自然資源を教育資源として活用し、楽しみながら「海洋リテラシーの向上」を目指している。



図28 大洗サンビーチ津波避難施設（ビーチセンター）

出典：大洗町公式ホームページ

<https://www.town.oarai.lg.jp/chouseijouhou/chounainosisetu/koukyousisetu/3164/>

東日本大震災後、大洗SLSCは、大洗サンビーチで行われる防災一辺倒の護岸工事に偏らずビーチを通年安全に楽しむ拠点『ビーチセンター』の実現を唱えた。大洗町は茨城県が実施する津波高潮対策事業と一体的な目的を持つ施設として「大洗サンビーチ津波避難施設」（ビーチセンター）を整備。ビーチセンターは鉄筋コンクリート2階建てで、津波発生時の逃げ遅れが想定される車椅子利用者や身

体の不自由な人などを約180名収容することが可能である（図28）。平時はビーチセンターを活用した活動を通じて防災意識を高めると共に、ユニバーサルビーチ活動を推進し、「すべての人にやさしい」理想のアミューズメントビーチを目指している。

▶名勝「大洗」大洗海岸の岩礁が文化財指定される（町文化財）

2009（平成21）年、大洗海岸はその岩礁地区における地質・動物・景観などの自然形成に対し、人間はそこから有用なものを取捨選択し、生活の糧を得るための歴史的舞台としてきた経緯を踏まえ、多様な価値を持つ神磯鳥居や50以上の岩礁を含む、大洗岬から県営大洗公園駐車場周辺の南北1.8キロ、東西0.9キロの岩礁・水域を町文化財（名勝）に指定した（図29）。

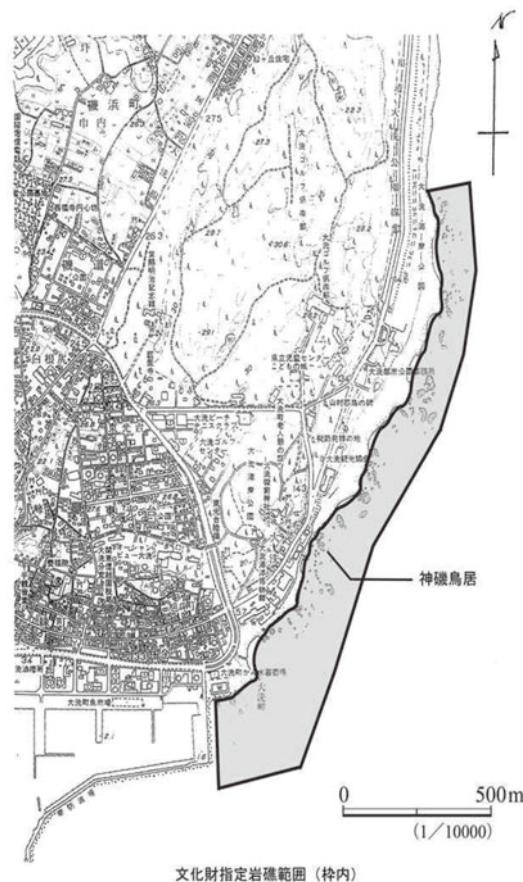


図29 「名勝『大洗』文化財指定岩礁範囲」

出典：大洗町教育委員会 2009 蓼沼 香未由

その歴史的意義や大洗町を代表する景勝地であることを踏まえ、指定した岩礁・水域を名勝「大洗」と呼称し、景観を保全するとともに観光振興等に活用することとして、大洗海岸（図30）の文化価値を確定させた。

▶JCO臨界事故による風評被害から結束。あんこう鍋のブランド化へ

1999（平成11）年9月のJCO臨界事故により、大洗町の宿泊施設はキャンセルが相次ぎ、宿泊客が激減した。この危機感から宿泊業者や観光協会が結束し、同年12月に「あんこう鍋」（図31）を冬の代表料理とする企画実行委員会を発足。初代委員長の大里全氏を中心に、宿泊施設間の協力を進めるとともに、「あんこう鍋フェア」や観光キャラバンを展開し、あんこう鍋をPRした。キャラバンでは「あ



図30 名勝『大洗』のある大洗海岸

出典：大洗観光協会



図31 「大洗あんこう鍋」

出典：大洗観光協会



図32 「大洗あんこう祭では、数千はい杯のあんこう汁を調理する」

出典：石井盛志

んこう汁」を振る舞い、各地での認知度向上を目指した。また、提供されるあんこう汁の味のばらつきを解消するため、調理勉強会を開催。炒った肝を使った味噌仕立てが統一化され、現在の大洗あんこう鍋の基盤が築かれた。濃厚な漁師料理「どぶ汁」と似つつも、なめらかで口当たりの良い独自の

味わいが特徴である。これらの活動の結果、冬の大洗＝あんこう鍋というイメージが定着し、「大洗あんこう祭」（図31）との相乗効果で地域の食文化として広く認知されるようになった。食後感が良くリピートしたくなる味わいは多くのファンを魅了している⁵⁷⁾。

g. 交流観光期

平成23～令和2年 キーワード（大震災→SNS、アニメ聖地巡礼→交流が観光資源→文化や生活が観光資源）

聖地巡礼・交流観光から、文化観光と生活観光へ
観光開発なく地域が観光資源になる

▶アニメ「ガールズ&パンツァー」のファンと商店街との深い交流

2012年に放送されたアニメ「ガールズ&パンツァー」（以下ガルパン）の舞台である大洗町は、作品の影響により全国から多くのファンを惹きつける観光地となった。10年を経た現在もファンと地元住民の間に濃密な関係が築かれている。ガルパンは戦車競技をテーマにした作品で、大洗町がその舞台として登場する。作中の町並みが忠実に再現されていることや戦車描写の精巧さがアニメ・ミリタリーファンを引きつけた。続編や劇場版のヒットに伴い、大洗町には国内外から多くのファンが訪れるようになった。その結果、町内ではファンと商店街の間に深い交流が生まれた。特に、商店街に設置されたキャラクターパネルが商店主とファンの対話を生み、商店主がガルパンに詳しくなるなどの影響を与えた。さらに、ファンが商店を手伝ったり、家族のような関係を築いたりする例も見られるようになった。これらの交流が町全体の活性化につながり、大洗町は「いつ行っても楽しめる場所」として認知されるようになった⁵⁸⁾。



図33 商店街に設置されたキャラクターパネル

出典：大里明

▶ガルパンファンによるツーリズムが長期持続する理由

ファンはイベント時だけでなく、非開催時にも訪問しており、大洗駅や大洗シーサイドステーションを拠点に、ガルパンギャラリー、ガルパン喫茶、商店街、大洗磯前神社などを巡る多様な観光行動を展開している。また、一般観光客に比べ行動範囲が広く、宿泊を伴う訪問が多い傾向が見られた。

初来訪のファンは若年層が多く、遠方から宿泊を伴って訪れる一方、リピーターは大洗町近隣在住者が多く、個人で訪問する傾向が強い。リピーターは観光地の交流だけでなく、自らの興味に基づく行動を行い、これを受け入れる観光空間が大洗町に形成されていった。このような多様な観光行動を支える背景には、大洗町の観光地としての地理的条件や歴史的に整備された観光インフラがある。また、ガルパン関連のイベントや取り組みの継続も重要な要素であり、劇場版公開後の大洗町の観光空間の再編（既存の観光空間から、商店街などのこれまで観光空間とみなされていなかった空間が観光空間に変容し、観光者の行動範囲が広がったこと）がファンを惹きつける契機となったことが示唆された⁵⁹⁾。

▶大洗の魅力的な歴史とガルパンファンによる、文化観光・生活観光の可能性

ファンが町に馴染む中で、大洗の歴史や文化への興味が高まり、史跡や遺跡の保全活動が始まった。例えば、日下ヶ塚古墳ではファンが除草作業を行うなど、地元史跡への関心が広がった。また、ガルパンを契機に大洗の歴史をまとめた書籍「大洗の本」の発刊や、地元の歴史に関するイベントも開催されている。これらの動きは、ファンと地元住民が協力して地域文化を深掘りし、未来に伝えていく取り組みの一例である。ガルパンファンの活動は観光の枠を超えた「生活観光」にも通じる。彼らは大洗を第二のふるさとと感じ、町の日常や歴史を楽しむ。ガルパンの成功は、既存の歴史研究とファンの関心が融合した結果生まれた文化観光の可能性を示す。そのため、これからは地元住民が大洗の魅力をさらに深く理解し、それを発信していくことが重要である⁵⁸⁾。



図34 ガルパンファンとの交流会

出典：大里明

▶「神磯の鳥居」の人気

大震災以降に社会でインスタグラム等のSNSが広く利用されるようになると、宮下旅館街の前の海岸にあるフォトジェニックな「神磯の鳥居」を撮影したり、そこで記念写真を撮る人々が増えた。日の出の時刻に合わせて撮影をするために、夏は午前4時台でも旅館前の海岸で日の出を待つ人々の姿が日常風景になり、元旦の朝は人多すぎるほどの状況になっている（図35）。SNSによる集合知で知名度が高まり、発信力の強いメディアでも大きく取り上げられるようになり、聖地として紹介されている。大洗磯前神社とともに大洗町で多くの外国人観光客が訪れる場所として知られ、国際的な観光振興における文化観光資源の中核として期待される^{60) 61)}。



図35 「令和7年元旦の朝の神磯」(左) 出典：石井盛志, 「神磯に昇る朝日」(右)
出典：大洗観光協会

▶ 潤沼がラムサール条約湿地に登録される

潤沼は2015(平成27)年5月28日にラムサール条約に登録され、茨城県では渡良瀬遊水地に続いて、2件目の登録地となった。ラムサール条約湿地として登録するための国際的に重要な湿地の基準は9つあり、そのうち基準2、基準4、基準6が該当した。

- ・基準2：絶滅のおそれのある種や群集を支えている湿地
- ・基準4：動植物のライフサイクルの重要な段階を支えている湿地
または悪条件の期間中に動植物の避難場所となる湿地
- ・基準6：水鳥の1種または1亜種の個体群の個体数の1%以上を定期的に支えている湿地

潤沼の基準該当理由

- ・基準2では、貴重な鳥であるオオワシとオオセッカの生息地である。
- ・基準4では、多くの生き物たちの重要なライフサイクルを支える湿地を有する。
- ・基準6では、スズガモが毎年冬に5,000羽前後ほど飛来、1%基準を満たす湿地である。

潤沼のラムサール条約登録申請準備段階の2015(平成27)年3月18日にラムサール条約事務局長のクリストファー・ブリッグス氏がラムサール条約登録湿地候補地の潤沼を視察した。案内人の茨城



図36 ラムサール条約に登録された潤沼
出典：大洗観光協会

町職員は涸沼の状況説明の中の1つに「涸沼は海が荒れている時は、スズガモの避難場所の役割も担っている」と説明を行っている⁶²⁾。

▶夕日の郷松川が涸沼湖畔にオープン

2016（平成28）年，松川漁港のある涸沼湖畔に「夕日の郷松川」が松川地区交流拠点整備事業としてオープンした（図37）。大洗町の市街地から離れた閑静な水辺にあり，筑波山に沈む夕日が涸沼湖面に映える風景が美しい。地域の人々が運営主体となっていることが特徴で，農業体験，水辺の体験（カヌー体験・釣り体験等），昔遊び体験等の各種体験事業を中心に事業を展開。地産野菜を中心とした直売所や交流室を完備しているほか，バーベキューやキャンプの受入れも行っている。



図37 夕日の郷松川（左），涸沼湖畔でのキャンプの様子（右）

出典：大洗観光協会

h. 生活観光期

令和2年～ キーワード（コロナ禍→マイクロツーリズム，清浄環境が観光資源（キャンプ，グランピング）×地方創生→二拠点居住，貸別荘）

マイクロツーリズム。異日常の環境を求める旅。生活観光への接近

新型コロナウイルスの流行でソーシャルディスタンスという言葉が生まれ，自宅で仕事をする人が増え，ワーケーションなど，暮らしのかたちに変化し，旅と融合した。清浄な環境で旅をしたいという需要からキャンプやグランピングが流行したり，地方創生と結びついて地方で暮らすような旅が提案されはじめ，地方に民泊や貸別荘が増えた。都市でもライフスタイルホテルなどが定着し，街そのものに関心を持つ旅が新しい旅のジャンルとして若者を中心に定着しつつある。星野リゾートOMOや，NIPPONIA，谷中のHAGISOなどの「まちやど」が生活の中に観光資源を見つけている。

▶大洗観光協会に事業戦略チームを設置

2017（平成29）年，大洗観光協会会長に大里明氏が40歳で就任。大里氏は新たに大洗の観光の将来を考える若手のグループを構想し，大洗町の老舗漬物店を経営し，地元サッカーチームの運営など積極的なまちづくり活動をしている30代の大山壮郎氏をリーダーに抜擢し，「事業戦略チーム」を発足した。大洗観光協会に所属する事業者から有志を募り，若手メンバーで構成されたチームである。地域のブランド化と通年型観光を目指し，以下の3つを柱として活動している。

- ・ 共創のコーディネート（町と民間業者や外部組織の連携）
- ・ 超COOLの発見と創造（イノベーション可能な観光資源の発見と創造）

・ターゲットへの発信（消費者への的確な情報発信）

観光施策を検討するにあたり、チームは現地視察を繰り返し、大洗町の観光資源を現状や歴史など多角的な視点で再評価した。その結果、観光資源ごとの魅力や課題、アイデアを洗い出し、どのターゲットにどのような施策で訴求するかを議論。1年間にわたりフィールドワーク（図38）とディスカッションを重ね、実行可能な施策を設計し、具体化に向けたミーティングを繰り返してきた。



図38 事業戦略チームのフィールドワーク 大洗サンビーチ（左）、日下ヶ塚古墳（右）
出典：石井盛志

▶コロナで海水浴場閉鎖の緊急対策で生まれた「砂浜図書館」

2020（令和2）年、大洗町の観光事業は新型コロナウイルスの影響でほぼ停止し、夏の海水浴事業も全国的に中止となり、町内の観光事業者に深刻な打撃を与えた。そこで事業戦略チームはコロナ禍でも海を楽しめる新たな事業を検討し、「砂浜図書館」を企画した。新型コロナウイルスによりビーチが閉鎖される中、ビーチの新たな活用法としてこれまで海を訪れなかった人々に「初体験」や「ライフスタイル」を提案、マイクロツーリズムを意識し海浜利用のユニバーサル化を試みた。

ターゲットとしたのは、海遊びや泳ぐことに抵抗を感じる人、海辺でおしゃれな時間を過ごしたいが方法が分からない人、ゆっくりと過ごしたい人たちである。これらの人々が日常的に楽しむ活動として「読書」に着目し、砂浜にタープで日陰を作り、読書を楽しみながら海を感じられる空間を提供する「砂浜図書館」が実現した。この取り組みはコロナ禍での新しいイベントとして、テレビや新聞各社から注目を集めるなど、多くの国内外メディアで紹介され、反響を呼んだ⁶³⁾。

大洗サーフ・ライフセービング・クラブが育んできたユニバーサルビーチの思想から影響を受けた砂浜図書館の取り組みは、海水浴場閉鎖という非常事態の中で大洗の風土を活かした生活観光の新たなマーケットをつくり、海浜保養地らしいデザイントラベル（*）としても評価できる。同年には「いばらきデザインセレクション2020」の知事選定を受賞した。

*デザイントラベルとは、暮らしや観光をデザインの視点で見つめ直し「その土地の人による、その土地らしい、その土地ならではのメッセージがあり、お手頃価格で利用できるという四つの要素をもつ観光」のこと。

D&DEPARTMENTが提唱した造語。

千冊もの本を屋外で管理する仮設図書館であることや強風から複数のタープを保守管理する困難さがあり、長期的な運営にはひとまず課題を残したが、オルタナティブな観光実験として評価すれば、



図39 「砂浜図書館」読書フィールドの入口（左上），タープでつくる読書席の中（右上），千冊をそろえた本棚（左下），解放感のあるパラソル席（右下）

出典：石井盛志

逆境の中でも観光資源を新たに生み出せる機運を作り出したことは大きい。

▶「うみまち照らす～大洗の一隅を照らす～」を開催

砂浜図書館と併せて開催した砂浜でのナイトイベントは、夜の魅力を求める多くの来場者で賑わい、新しい客層の来場も見られた。夜の観光コンテンツへの高い需要が確認され、大洗町の新しい魅力発信の可能性を感じさせる結果となった。その流れを受け、2022年度事業として、夜の観光資源を活用する「うみまち照らす～大洗の一隅を照らす～」を開始。大洗磯前神社、大洗サンビーチ、磯浜古墳群の3か所でライトアップを実施した。

大洗磯前神社のイベントでは、高校書道部のパフォーマンス、雅楽と巫女の舞、和楽器演奏、山村暮鳥の詩の朗読などのプログラムが展開され、来場者は夜の神社の雰囲気と「祈り」のコンセプトをゆっくりと感じていた。大洗サンビーチではキャンドルナイトを中心に、波音をBGMに夜の砂浜でくつろぐ時間を提供し、来場者から好評を得た⁶³⁾。

2020（令和2）年に国の史跡に指定された「磯浜古墳群」の日下ヶ塚古墳での開催（図41）は初の試みであった。古墳の墳丘前にステージをつくり、コンテンポラリーダンスや音楽プログラムを実演。古墳の眺望の良さを生かした打ち上げ花火も実施し、日下ヶ塚古墳の地形を楽しむことに努め、町内外の人々に古代の埋蔵文化財を新鮮な気分で楽しんでもいただける機会となった。

「うみまち照らす」の魅力は、その夜祭的な性格から住民が惹きつけられる特徴を持ちながらも、観光客も参加してみたいと思う文化観光と生活観光を兼ね備えているところにある。夜のイベントで



図40 「うみまち照らす in 大洗磯前神社」 2022

出典：大洗観光協会



図41 「うみまち照らす in 磯浜古墳群」 2023

出典：大洗観光協会

一定の集客力もあったことも観光資源として可能性がある。

▶大洗町観光情報交流センター「うみまちテラス」

これまで大洗町の観光案内所は大洗公園にあったが、2020（令和2）年9月10日に大洗駅の隣にオープンした「うみまちテラス」が観光案内所業務を引き継ぐことになった。鹿島臨海鉄道の利用客に便利なレンタサイクルの貸し出しやお土産品販売を行っている。大洗町は小さな町のため、レンタサイクルなどの観光インフラを利用することで、大洗町の「うみまち文化」を肌で感じることができ、海浜リゾート環境や海の町の生活観光を清々しく楽しめる（図42）。

▶宿泊施設の多様化

1980（昭和55）年の民宿は104軒で、海岸沿いに広く分布していた。同時期の民宿以外の宿泊施設数は把握できなかった。2015（平成27）年には宿泊施設が51軒に減少し、民宿の数は25軒に減った。一方、ホテルや保養所が増え、観光形態の多様化が進んだ⁶⁴⁾。渡邊ら⁶⁴⁾が調査した大洗町の宿泊施設（2015年調査対象38軒）の開業年を10年ごとに整理すると、図43のように表せる。1960年代から1970年代にかけて宿泊施設の開業が急増したことが確認できる。

1985（昭和60）年の大洗港区第3埠頭整備以降は宿泊施設の開業が鈍化している。市街地近くの大洗海水浴場が消失し、大貫海水浴場に代わり形成された大洗サンビーチは町から遠く、既存の海水浴



図42 うみまちテラス（左），レンタサイクルの案内（右）

出典：大洗観光協会公式サイト

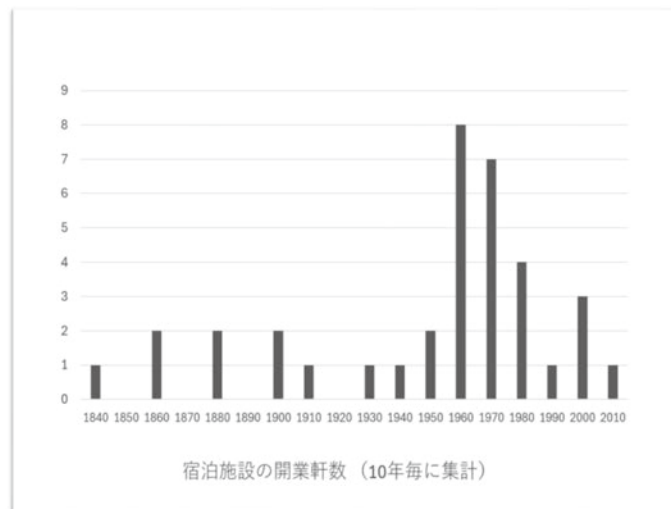


図43 大洗町の宿泊施設の開業数推移（10年毎に集計）（渡邊瑛季・阿部依子・伊藤瑞希・猪股泰広 王 瑩・名倉一希・松原伽那・山下清海2016「茨城県大洗町における海浜観光地域の継続的發展要因」地域研究年報12頁の資料をもとに作製）

旅館や民宿への影響があったとみられる。1991（平成3）年のバブル崩壊以降では海水浴客の減少が続いても大洗港区に観光施設の開業が相次ぎ、交通網が発達した結果、日帰り観光客数を大きく伸ばしたが、宿泊客数の減少傾向は続いたとみられる。こうした外部環境の変化から市街地にある宿泊施設では海鮮料理にこだわる運営が定着化した。1998（平成10）年の第1回あんこう祭から大洗町のあんこう鍋のブランド形成が進み、冬の安定した宿泊需要を作り出している。隣接するひたちなか市の国営ひたち海浜公園では、2002（平成14）年にネモフィラの植栽が、2007（平成19）年にコキアの植栽が始められ、大洗の閑散期にあたる春と秋の集客が伸び、宿泊施設の客室稼働率の通年に影響を及ぼしていった。このようにして、長年にわたり夏一極型の宿泊であったが、近年は通年にわたり稼働率が安定する傾向に変化している。図43にはデータが含まれていないが、2011年の大震災以降から宿泊施設の変化がみられるようになった。小規模高級旅館の開業やリゾートホテルの高単価客室へのリニューアルがみられ、高単価のマーケットを探る動きが始まった。国内大手のホテル運営会社など外部資本への売却や参入も見られる。インバウンドへの対応から民泊が開業し、コロナ禍にはグランピングや貸別荘も開業した。このように様々なタイプの宿泊施設が増え、宿泊マーケットの再編が起きている。

▶大洗観光協会が観光地リブランディング、「海の郷」ブランド形成に取り組む

2023（令和5）年に、茨城県インバウンドコンテンツ造成支援事業を活用した「開運大洗プロジェクト」活用し、観光地リブランディングに着手した。リブランディングの目的は以下の通り。

目的① 当協会の自主収益化を確立する仕組みをつくり、地域に還元する

観光協会会員の収入に直接寄与するDMOを目指す。地域限定旅行業を営み、大洗町観光のリブランディング、インバウンドマーケティングを組み合わせ「ブランド強化」「稼ぐ力」「商圈拡大」を図る。収入から観光振興への投資・循環を図り、まちづくりの視点に立った観光地づくりを行い、後継者育成や移住促進に寄与するサステナブルな社団法人を目指す。

目的② マイクロツーリズム圏での優位性をつくり、インバウンド市場にも反映させる

マイクロツーリズム圏におけるリブランディング

首都圏マイクロツーリズム圏（都心100km円上の宿泊観光地）で、親しみやすく歴史ある海浜観光地として認知され、生活観光地として交流が期待できる保養地として情報発信を整理する。

インバウンド市場におけるマーケティング

インバウンド客が日常的に来訪している大洗磯前神社を入口として、アジア圏観光市場への積極的参入を図る。大洗町の宿泊事業者が慣れている台湾市場からの受入体制をつくり、アジア圏に伝わり易い「開運」をキーワードにアジア圏へのプロモーション展開を実施する。

▶目的②を達成する、観光地リブランドの戦略

戦略1. 大洗の由緒ある豊かな保養風土を観光資源として可視化させる

大洗の由緒ある豊かな保養風土を可視化し、観光テーマを「常世國大洗 海の郷」とリブランド。

現在の大洗町は大洗海岸、那珂川、酒沼川、酒沼に囲まれた「親水空間のまち」である。関東唯一の汽水域から「海の郷」と呼ぶ。大洗観光協会は大洗ならではの自然環境や風土を観光資源を鮮明にすることに努め、生活観光や文化観光を振興する役割を担う。ロゴデザインは、朝日を浴びる海の色は金波と呼ばれ、田園の多い豊穰な稲穂の海も広がる大洗、その豊かさの海に鳥居が足を下ろすデザインとなっている（図44）。



図44 大洗町の風土性を反映させた観光地ロゴ
出典：大洗観光協会

戦略2. 大洗町の様々な場所を、ユニークベニュー（地域特色のある特別な場所）にする

大洗の風土と現代的な娯楽を結び付けることで、大洗町の様々な場所をユニークベニュー（地域特色を楽しめる特別な場所）として観光資源化（砂浜図書館やうみまち照らすの大洗磯前神社や日下ヶ

塚古墳などのように)。

戦略3. 生活観光の基盤形成のために、大洗町を4つのエリアに分けてブランディング

大洗町を風土の異なる4つのご逗留エリアに分け(図45),宿から徒歩圏を「ご逗留エリア」と呼ぶ。宿からの街歩きを情報発信し、生活観光を含めた旅のかたちを付加価値としてブランドをつくる(ライフスタイルホテルや、NIPPONIAなどに見る、地域生活資源を利用した付加価値と同じ)。



図45 4つのエリアに分けて地域逗留の魅力をアピール。宿泊価値を可視化

出典：大洗観光協会

3-3 大洗町の観光地としての価値や今後の発展について

3-3-1 大洗町の観光資源・観光価値

前項にて大洗町の観光地の形成過程を詳細に見てきた(表1に整理した)が、今後の発展を考察する上で大洗町が観光地となり得た観光資源についても改めて整理し、今後について考察する際の考慮すべき点としたい。

表1 大洗町の観光地形成年表

期(時代)	風土形成または観光形成となるキーワード
観光地前史 (旧石器～平安時代)	一本松遺跡群と髭釜遺跡、磯浜古墳群、阿多可奈湖、平津駅家、大洗磯前神社
観光文化黎明期 (室町～江戸時代)	漁村形成、潮湯治、徳川光圀、大洗磯前神社の再興
観光産業黎明期 (明治時代～終戦)	近代海水浴、水濱電車、宮下旅館街、宮内省御料地
観光地導入期 (戦後～昭和36年)	自然公園の指定、都市公園の指定、磯節、大洗水族館、大洗ゴルフ倶楽部
観光開発期 (昭和36～昭和60年)	重要港湾指定、交通アクセス拡充、漁港、フェリー、大洗サンビーチ、潮干狩り
観光再編期 (昭和60～平成23年)	海水浴場→海洋性リゾート、あんこう鍋、ユニバーサルビーチ、サーフィン
交流観光期 (平成23～令和2年)	大震災→SNS、アニメ聖地巡礼→交流が観光資源→文化や生活が観光資源
生活観光期 (令和2年～)	コロナ禍→マイクロツーリズム、清浄環境が観光資源(キャンプ、グランピング) ×地方創生→二拠点居住、貸別荘

大洗町が観光地となり得た観光資源（観光地としての価値）：

1. 親水空間の豊かな町（海水浴、浜×潮干狩り、磯×磯遊び、サーフィン、マリーナ）
2. 唯一無二の海景色（神磯の鳥居、荒磯、リフレクションビーチ、日の出と月の出）
3. 自然環境と気候（海浜環境の清浄性、汽水、潮間帯、森林浴、名門大洗ゴルフ倶楽部）
4. 由緒（大洗磯前神社、近代海水浴と潮湯治、磯浜古墳群、徳川光圈、磯節）
5. 食文化と地産地食（あんこう鍋ブランド、鮮魚料理、農作物も豊かな地域）
6. 通年観光に寄与するアクアワールド大洗、大洗港区エリア（みなとオアシス＋漁港）
7. 重要流通港湾拠点として整備された首都圏からの交通アクセスの充実
8. ユニバーサルビーチ理念からソーシャルデザインを目指す観光まちづくり
9. 漁村文化と自然災害、交易要衝として育まれた協働性、受容性、交流性
10. 県内主要観光資源が集積する観光圏（水戸・ひたちなか・笠間）からの観光客流入

3-3-2 大洗町の観光地としての今後の発展

コロナ禍により経済的にも疲弊した観光地の復興および観光による地域活性化には、高付加価値化が欠かせないと観光庁は説く。具体的には、「観光地の面的な再生・高付加価値化を推進することにより、観光産業においては、必要な設備投資等により高付加価値なサービスの提供や生産性の向上が図られ、適正な対価の収受を通じて収益の増加が可能となる。また、その収益により更なる設備投資の増加、従業員の待遇改善が図られることによって、サービスの更なる高付加価値化につながるといった好循環が実現する。こうした産業の好循環が、雇用の確保・安定や所得の増加を生み出し、税収の増加にも寄与するとともに、地域に対する住民の誇り・愛着の醸成、地域からの人口流出への歯止めや観光旅行者受入れへの理解・協力が促進され、それが観光地の更なる魅力向上につながることで、地域への来訪者や消費が更に増加し、観光地全体の稼ぐ力が向上する。こうした観光地の面的な再生・高付加価値化を通じて、地域・産業・住民のいずれもが観光による地域活性化の果実を享受するとともに、それらを観光地の更なる磨き上げにつなげていくことで、観光を通じた持続的な地域活性化の好循環を創出していく。このため、観光地・観光産業の再生・高付加価値化に向けて、宿泊施設、観光施設等の改修、廃屋撤去等のハード面の取組に加え、キャッシュレス化や、シームレスな予約・決済が可能な地域サイトの構築等の観光地における面的なDX化によるソフト面の取組を、複数年度にわたる計画的・継続的な支援策を活用して推進する」^{〔注5〕}としているが、観光地における価値を何とするかによって、また観光地の独自性によっても上記の高付加価値化の方向性も異なってくるのではないか。以下に、観光地の高付加価値化を考える際に、その論点を整理して置く必要がある。

（1）高付加価値投資のコモディティ化

どこの観光地でも取り組めるような高付加価値投資は、すぐにコモディティ化してしまう現実があること。宿泊業において、昭和の大型旅館、平成の小規模高級旅館・デザイナーズ旅館・露天風呂付客室、令和のグランピング等、新しい宿泊娯楽のブーム、ブルーオーシャンが幾度となく作り出された。しかし、市場参入当初はもてはやされるが、すぐに類似する宿泊施設への投資が行われ、数年間のうちにその市場がレッドオーシャン化し、当初高付加価値であったものが、当たり前価値（標準価値）へと変わり、結果として埋没していく傾向にある。

（2）観光的独自性の高付加価値化

当該観光地の魅力は、他の地域が獲得することが難しい固有性や独自性を有する環境や風土、文化

であり、それらを高付加価値化することが、その他地域との差別化・優位性を得て、コモディティ化しない真の上乗せ価値が生まれることになる。

改めて、観光地の価値とは多面なもので、観光客・旅行者が訪れた地域で、その場でしか体験できない事柄、代え難い特別な時間・情景、得難い情報等に見出すことができる。観光する（見る）ことに限らず、体験し、そして長期滞在する（居る）ことで実感ができ、価値としての多面性は、およそ6つに分類が可能であろう。

(1) 文化・歴史的価値

その地域の歴史や伝統、文化を象徴する場や事柄。食文化。

(2) 自然的価値

美しい自然景観や独特の生態系

(3) 経済的価値

交通、宿泊、飲食、土産物等含む観光産業を中心とした地域経済

(4) 社会的価値

地域住民との交流、コミュニティ、関係人口

(5) 教育的・体験的価値

歴史や環境問題、スポーツなど学び、体験する場について学ぶ場

(6) 感情的価値

居心地の良さ、観光客を含む訪問者に感動や思い出を与える体験及びその機会と場

江戸時代から継続している保養地、その環境の良さが特徴の大洗だが、その観光地としての価値は、3-3-1にても整理した通り、その経緯・成り立ちからも明らかなが、複合的・多層的であるため、上記の一つの価値だけでは判断されるべきでない。大洗の観光地としての価値を今後さらに高めるためには、現状の素晴らしい環境（自然環境、文化歴史環境も）を守りながら、観光客を受け入れる、持続的な観光の実現を図ることが第一である（観光的独自性の高付加価値化と言っても良いだろう）。加えて、この地域の魅力（これまで観光地として選ばれ、愛され続けてきたこと、他の地域にない伝統やサーフィン等を含めた地域文化）を広めて行くことが必要となる。さらに、地域住民に対して、大洗の観光地形成の経緯やその価値をきちんと伝えていくことも同時に必要だろう。すなわち、関係する人たちが地域の環境的豊かさを能動的・主体的に高め、その環境が有する資源を用いて地域が質的に豊かになる能力（エリアケイパビリティ）を理解し、高めていくことが有用である。

一方で、観光保護の観点から継続的に観光地としての景観や施設等インフラの整備を行うことに加え、アクセスしやすい道路・鉄道の整備、地域内の交通やバリアフリー化等、観光地としてインフラ価値を上げていくことも必要である。継続的な発展のためには、観光客だけでなく、交流人口や関係人口も受け入れながら、自由な発想で価値あるものを生み続け、自治体や観光協会はそれらを支援し、継続的な事業・ビジネス化していくことが重要であろう。具体的には以下の点に集約される。

(1) ダイナミック・ケイパビリティの視点

不確実な社会に対応するダイナミック・ケイパビリティ（市場や顧客のニーズといった変化に対応し、企業自ら変革していくこと）を活かした観光施策・振興が、大洗には今後も不可欠である。実際に、大洗ではコロナ時期の緊急事態宣言で海水浴が全国的に否定された時期に、人混みをつくらない

図書館という環境を海岸に配置し、普段、海水浴場に居場所が無いと感じていたライトノベルを読んでいるような大学生をターゲットにするという発想をした。本さえ手に持っていればビーチを居場所として感じていただけるだろう、というのを発想したのである。広大なビーチを掛け合わせた観光商品化は大きな反響を呼び、大洗サンビーチのユニバーサルビーチの可能性を広げた。

(2) エリア・ケイパビリティの重要性

大洗住民がこの町をとりまく自然から受けた多大なる恩恵やその中で積み重ねてきた先人によるまちづくりの歴史を知り、その価値や固有性・独自性を再認識することが、大洗でのエリア・ケイパビリティ（人々が地域の環境的豊かさを能動的・主体的に高め、その環境が有する資源を用いて地域が質的に豊かになる能力）に繋がっていく。そして、住民たちが大洗の価値や独自性を元住民や地域外の人たちへ分かち合うことで、大洗の魅力を感じてもらうことに繋がっていくエリア・ケイパビリティの考え方が重要となる。すなわち、その土地の暮らしに根付いたものが豊かで、そこに住む住民や他の町に住む人がそれらを魅力的と感じる観光地「生活観光地」が大洗の今後の発展に向けて重要になると考える。

4 大洗の風土から生まれる生活観光地の可能性

4-1 大震災から芽生えた小さな市民文化活動

東日本大震災以降、ウェルビーイングの実現やコミュニティづくりにもなっている小さな市民文化活動が大洗町で見られ、その活動は観光資源の新たな領域を形成する可能性を持っている。都会の都市公園の園内各所で行われる市民の自発的な文化活動が大洗海岸や大洗サンビーチなどの親水空間をもとに行われている。学生サークル活動の社会人版とも言えるような親しみやすさと会員となる必要がない気楽さもあり、町外と町内の人によるポジティブな活動となっている。SNSによる親しみやすい情報発信と参加者の活動の様子もレポートされるため、大洗町民以外の遠方の人も安心して参加できるように注意が払われている。活動の企画者は参加者の精神的充実や新たな価値観との出会いと共有、人と人のつながりを成果として、参加者同士が活動の魅力を分かち合う余韻の時間が大切にされている。商業的な観光活動に比べて、事業予算は企画者自身の自費である場合が多く、ローコストで運営されるため、参加費は活動の持続に必要な最低限の費用であるか無料の場合もある。そのため活動も長期にわたり参加者の再訪も続きやすい。そのため、豊かな人間関係が築けるという期待を持てる。

事例1. 風にころがるTシャツ展

2019年より大洗の2つの海岸で私設展覧会を主宰する大洗町役場職員の栗原敬太氏は、2018年秋頃から砂浜を舞台にしたアートイベントを考えていたという。栗原氏の活動理念に共感する仲間でセルフビルドで計画・実行されている。以下、この展覧会の実行の経緯について、本人からの聞き取りなどを元に述べていく。

2011年の東日本大震災で大洗町は高さ4mの津波が到来し、町の低い土地は飲み込まれて被害を受けた。震災後は大洗町も国内の津波被災地と同様に、町の沿岸を防潮堤で覆う津波高潮対策が嵩上げが計画され、工事が実施されていた。大洗町の海の景観は観光客や観光業だけではなく、元来より地元の人々にとって郷土の風景であるため、海が見えなくなる防潮堤の嵩上げの問題は観光関係者と自治体との間で慎重かつ困難な議論になっていた。同じ時期に、震災後調査のために京都大学防災研究所特定研究員の李勇昕氏が研究調査のためにしばしば大洗町に訪れていた。李勇昕氏は住民主体によ



図46 大洗サンビーチ「風にころがるTシャツ展」

出典：風にころがるTシャツ展実行委員会2021

る防災活動の確立，すなわち住民の防災意識が高まり有事に円滑な避難を実施するために，どのような取り組みが必要であるかを研究している。李勇昕氏は大洗町と同様に海が大切な地域資源であり，津波対策のまちづくりを行っている高知県黒潮町を大洗町に紹介し，互いにそれぞれの町へ訪問し，海を目前に防災や観光などについて相互に学び合う交流会を企画した⁶⁵⁾。

こうして2019年の1月，栗原氏は大洗町役場まちづくり推進課の職員として高知県黒潮町を訪問し，防潮堤に頼ることの出来ない町の防災対策と避難対策のためのまちづくりを学んだ。黒潮町では栗原氏が関心を寄せていたNPO 砂浜美術館のTシャツアート展が長年開催されるなど，市民アート活動が住民と海を結び付けていた。そこには南海トラフの影響による津波高予想が最大34メートルと発表された土地にもかかわらず，悲観せず真っすぐに日々を生きる人々の姿があった。直に黒潮町の話聞いた栗原氏はいたく感動し，交流会の酒席で叫ぶように感動を周囲に伝えていたという。黒潮町の原動力はこれまで積み重ねてきた文化の力なのではないかと栗原氏は考えた。

かねてより栗原氏は自主製作で本を出版し，著書で大洗町について「海が遠くなった」と語る。港湾開発で物理的に海が遠くなったということではなく住民の心から海が遠くなったと感じているのである。栗原氏は自らのレジャーの姿勢を「シリアスレジャー」^{66) 67)}と呼び，釣りのために日常を動かしているほどに海と共生した暮らし方をしているが，素晴らしい海，恐ろしい海，どちらも人の思考に関係なく海から様々なものを見せつけられる。そこに生きようする本能が自然との共生であり，生きている実感となる。かつての大洗町はそのような町だった，と考えている。



図47 大洗海岸「風にころがるTシャツ展」

出典：風にころがるTシャツ展実行委員会2022，2024

「海をふたたび日常に」との思いで栗原氏は砂浜に人々を集めるため、「風にころがるTシャツ展」を企画した。そこには既存の観光イベントのような集客を主眼にした運営の仕方は一切寄せ付けなかった。Tシャツに描く作品は老若男女で、どこからでもネット応募できる。自由参加の市民展覧会のネット版であるから、どれだけ作品が集まるかも予想できないが、あまりに多く作品が集まると自主運営が困難になるのでプロモーション規模も大きくする必要はない。そもそも収益が上がらないことを承知の上で企画している。目的が経済活動では無いのである。

大洗の風はよく荒れるから展覧会名に「風にころがる」と名付けた。実際に浜辺に作品を見に行くと無風でTシャツに描いた作品がよく鑑賞できるときもあれば、強風でTシャツがひっくり返ってまったく見えないときもある。人間の活動が描かれたTシャツは容赦なく潮風に翻弄され、梅雨の雨に打たれ、強い日差しを浴びるのである。そうして自然と共生したTシャツは展示会後に作品提供者の元に送り届けられるのである。

栗原氏は「私が生まれた大洗でも、どんな困難をも乗り越えられるしなやかさを次の世代へ残したいと考えた。そのために、生あるものの積み重ねを形にできる土壌と人の輪、そして作品が必要だと考えた」と語った⁶⁸⁾。

事例2. 海岸清掃ボランティア「海と踊る」

大洗は那珂川河口に接する。東日本大震災以前でも洪水が起こると漂着ゴミが発生していたが、大津波の被害を受けて海洋にゴミが大量に放出されてから、しばらくのあいだ海岸にゴミが漂着し続けた。その後、防潮堤の嵩上げも全国で広がる中、海辺暮らしの幸福と海岸の自然環境の維持についてコミットする人が現れた。

金澤真里氏は大洗海岸と神磯周辺の漂着ゴミを拾う海岸清掃ボランティアの主宰者である。かねてより茨城県内の神社を巡り親しんでいたことから、土地の神様のご加護のもとで今を生きることへ感謝の思いを持っており、「環境を清める」清掃活動の動機となっている。2015年の初夏、大洗磯前神社の拝殿下の大鳥居の脇にある清良神社周辺が荒れている状況に遭遇する。神社の神様方にはお世話になっている感謝の念から、荒れた環境を清めるために神社の了解を得て、出来る限りの草刈と掃き掃除を行った。後日、清良神社にあらためて行くと、多くの人手によって綺麗な環境に様変わりし、感動で涙が出たという。環境を改善したいと自ら行動することが、輪として広がっていくことを実感した。



図48 海岸清掃ボランティア「海と踊る」活動の様子

出典：金澤真里2015-2024

金澤氏はその頃から海岸でゴミ拾いを自主的に行っていたが、活動を発信していなかった。しか

し漂着ゴミは一人でとても拾いきれず、清掃活動の輪を広げたいとの思いで、2016年初め頃に海のお掃除隊を結成した。金澤氏一人から活動をスタートさせ、ブログやFacebookを用いて自身の清掃活動を報告し、参加者をその都度募った。清掃活動への参加時間を自由にしたり、清掃だけでなく海岸でのんびり過ごすひとときも企画した。そして活動が義務的になることを避けるため組織化はしなかった。



図49 海岸清掃ボランティア「海と踊る」活動の様子

出典：金澤真里2015-2024

ゴミ拾いを通じて自生する海岸植物の美しさ・逞しさに海岸への愛が膨らんだ。この頃は、震災で大洗海岸の海底環境が変化したのか、台風で大波が発生するたびに大量の礫（小石）が海岸に溜まりやすい状況が続いていた。礫が防潮堤に溜まると越波しやすくなり大洗海岸に隣接する旅館街は波の被害を受ける。そのため、茨城港湾事務所による海岸砂利撤去が実施された。このとき金澤氏が大洗海岸に行くと海浜植物の群生が無残に踏み潰された状態を見てしまう。茨城港湾事務所に連絡し、海浜植物の自生が保護されることになった。

大洗海岸と神磯周辺の海岸清掃を始めて1年半経過した2016年の夏。金澤氏は海岸清掃を「海と踊る」と改めた。「海で踊る」ではなく「海と踊る」なのである。活動名を改めたのは自身の心の変化を感じたからだと言う。「始めはゴミが多く、焦りや悲しみ、怒りがあった。活動を続けていくうちに、『ここが好きだから』と体が動くようになった」と胸を張る⁶⁹⁾。



図50 海岸清掃ボランティア「海と踊る」活動の様子

出典：金澤真里2015-2024

4-2 観光から一時市民へ

事例1. 「あそびは暮らしを豊かにする」まちづくり会社

コロナ禍の時期に大洗町にUターンした佐藤穂奈美氏は、上記のような市民文化活動やソーシャルな課題の解決に挑戦した砂浜図書館を見て大洗町に希望を感じたという。佐藤氏は人口減少が続く地方暮らしの課題解決にコミットする不動産業として「あそびは暮らしを豊かにする」というソーシャルマーケティングで、地域の魅力を再編集を目指すまちづくり会社「株式会社Coelacanth」を起業した⁷⁰⁾。



図51 BOOK & GEAR焚火と本 店内および外観

出典：佐藤穂奈美2023, 2024

運営している中核施設である本屋兼ブックカフェ「BOOK & GEAR 焚火と本」では「本を通じて、まちとひとを知る」というマーケティングメッセージを起点に、ウェルビーイングとコミュニティづくりが期待できる「あそび事業」を展開。近所の人から遠くに住む人まで多様な人々が気軽に参加でき、「あそび仲間」が出来る「あそび企画」を日々SNSで発信している。そして市民からすればご近所の観光資源をフィールドにした遠足的な楽しみを「あそび」として提案する。このようにして観光地としてのイメージに慣らされた大洗町を市民から見た暮らしの魅力として再編集し、地域の価値としてダイレクトに発信している。



図52 海岸防砂林での読書会（左）大河ドラマを題材にしたイベント（右）

出典：佐藤穂奈美2023, 2024

事例2. 多拠点生活というライフスタイルを実現する宿泊施設

大洗町に貸別荘や民泊が増えている。平間一輝氏、葦原知氏らが「わづくる株式会社」⁷¹⁾は別荘サブスク OURoom 事業で、都市生活者に地方の別荘暮らしを手軽な料金で利用でき

るサービスを提供している。地方で別荘を購入するのではなく、定額料金を毎月支払うサブスクリプションで別荘を一定期間所有できる貸別荘のオンライン提供サービスと、貸別荘の管理運営をしている。一般の貸別荘と異なるのは、様々な地域の別荘を所有する多拠点生活というライフスタイルが手に入ることである。別荘管理の義務感に悩まず、所有感の感じにくい貸別荘とも異なり、多様な地方の暮らしを楽しむ入口として「どこでもドア」的な価値を持つ。空き家や未利用別荘をリフォームした独立した簡易宿所であるため、プライバシー性が保たれ、スケジュールに縛られず、その土地に暮らすような落ち着いた長期滞在ができる。



図53 「大洗OURRoom 1st」

平間一輝氏提供 2023

4-3 まとめ

市民文化活動の豊かさは生きがいや住み心地につながり地方創生の希望をつくる。地方観光地において、観光資源は市民文化活動の原動力や付加価値となり、地方観光地に新たな観光風土を形成する可能性がある。そして、観光地における市民文化活動は都市公園で行われる市民文化活動に似ており、大洗町は周縁に親水空間が多く、ユニバーサルビーチの思想など、町全体を公園に見立てやすい環境が整っていることを付記しておく。オーバーツーリズムが社会問題となる中で「観光の終焉」⁷²⁾を宣言したコペンハーゲンは、「一時市民」として地域の暮らしに参加し、楽しさを分かち合う生活観光を提案し話題となった。日本でもすでに由布院温泉のまちづくりのテーマは市民の暮らしに観光客を誘う生活観光地⁷³⁾で知られている。大洗町の2つの事業例(株式会社Coelacanth, わづくる株式会社)は観光客が交流や地方暮らしの入口として参加しやすく、継続性も期待できる事業を営んでいる。観光と暮らしが対立せず協働し、共生することが事業の魅力となっており、観光を組み込んだ地方創生のかたちとして興味深い。

5 今後の研究と課題

本研究は、国内観光地のその形成過程の類型を試み、大洗町の概要を俯瞰し、そして大洗町が保養地を出発点として、どのように観光地として形成していったかを調査した。本研究を通じて、その形成過程を検証することが、大洗町の観光地としての真の価値を見直し、見出すための一手段であることを再認識できたことは1つの成果である。一方で、時間等の制約から観光地形成の類型化については未熟なところがあり、また、大洗町の観光地形成においては更なる検証が必要であり、今後の発展に関する考察についても更なる研究が必要であることは明らかである。今後の研究課題としたい。

謝辞

本研究は、以下、大洗町関係者の方々の協力なしには成し得なかった。心よりここに感謝申し上げる（敬称略）。

大洗町教育委員会 蓼沼 香未由
風土形成事務所 廣瀬 俊介
大洗サーフ・ライフセービング・クラブ 足立 正俊
大洗観光協会 大里 明
大洗観光協会 鬼澤 保之
Wedge 小野瀬 祐一
株式会社吉田屋 大山 壮郎
風にころがるTシャツ展実行委員会 栗原 敬太
海岸清掃ボランティア「海と踊る」 金澤 真里
株式会社Coelacanth 佐藤 穂奈美
株式会社わづくる 平間 一輝

注

- 1) 国土交通省観光政策審議会 平成7年6月2日資料
- 2) 「望ましい観光地形成論」佐々木宏茂 国際地域学研究 第4号（2001年3月）
- 3) 「魅力ある観光地域づくりの秘訣」国土交通省総合制作局 平成20年3月発行、9ページ
- 4) 「推し活」とは、自分の好きな芸能人やスポーツ選手、キャラクターなどを応援する活動の総称。（デジタル大辞泉、2024年12月8日1050AM, <https://dictionary.goo.ne.jp/word/推し活/>）
- 5) 「地域一体となった観光地・観光産業の再生・高付加価値化」https://www.mlit.go.jp/kankochoseisaku_seido/kihonkeikaku/jizoku_kankochi/saisei_kofukakachika.html（2024年12月20日閲覧）

参考文献

- 1) 「魅力ある観光地域づくりの秘訣」国土交通省総合制作局 平成20年3月
- 2) 観光産業の最新景況レポート（2024年8月）
https://www.tdb.co.jp/report/industry/5178qn__ci/（2024年9月30日閲覧）
- 3) 大洗町「町の概要」ページ <https://www.town.oarai.lg.jp/chouseijouhou/machinogaiyou/2844/>（2024年12月20日閲覧）
- 4) 大洗観光協会「大洗について」ページ
<https://www.oarai-info.jp/about/>（2024年12月20日閲覧）
- 5) 大洗町「町の歴史」ページ
<https://www.town.oarai.lg.jp/kosodatekyouiku/rekishibunna/machinorekisi/2842/>（2024年12月20日閲覧）
- 6) 大洗町「現況と課題」資料
<https://www.town.oarai.lg.jp/wp/wp-content/uploads/2021/03/%E7%8F%BE%E7%8A%B6%E3%81%A8%E8%AA%B2%E9%A1%8C%EF%BC%88PDF%EF%BC%89.pdf>（2024年12月20日閲覧）
- 7) 大洗町「町の概要」ページ
<https://www.town.oarai.lg.jp/chouseijouhou/machinogaiyou/907/>（2024年12月20日閲覧）
- 8) 茨城県「市町村のデータ（大洗町）」ページ
<https://www.pref.ibaraki.jp/kikaku/tokei/fukyu/tokei/sugata/local/oarai.html>（2024年12月20日閲覧）
- 9) 玉川大学観光学部講義（鎌田伸尚教授）「地域文化論」内、大洗町まちづくり推進課講義資料

- 41) 常総新聞社 滝興治1902「常陸の海水浴」国立国会図書館デジタルコレクション 9-27頁 <https://dl.ndl.go.jp/pid/764368> (2025年1月13日閲覧)
- 42) 渡邊瑛季・阿部依子・伊藤瑞希・猪股泰広 王 瑩・名倉一希・松原伽那・山下清海2016「茨城県大洗町における海浜観光地域の継続的発展要因」地域研究年報6頁
- 43) 渡邊瑛季・阿部依子・伊藤瑞希・猪股泰広 王 瑩・名倉一希・松原伽那・山下清海2016「茨城県大洗町における海浜観光地域の継続的発展要因」地域研究年報6-7頁)
- 44) 大洗町史編纂委員会1986「大洗町史(通史編)」大洗町)
- 45) 渡邊瑛季・阿部依子・伊藤瑞希・猪股泰広 王 瑩・名倉一希・松原伽那・山下清海2016「茨城県大洗町における海浜観光地域の継続的発展要因」地域研究年報7頁)
- 46) 渡邊瑛季・阿部依子・伊藤瑞希・猪股泰広 王 瑩・名倉一希・松原伽那・山下清海2016「茨城県大洗町における海浜観光地域の継続的発展要因」地域研究年報7頁)
- 47) 大洗町公式ホームページ <https://www.town.oarai.lg.jp/cat1/koutsuu/oaraikou/2417/>(2025年1月13日閲覧)
- 48) 大洗町史編纂委員会1986「大洗町史(通史編)」大洗町813頁)
- 49) 渡邊瑛季・阿部依子・伊藤瑞希・猪股泰広 王 瑩・名倉一希・松原伽那・山下清海2016「茨城県大洗町における海浜観光地域の継続的発展要因」地域研究年報10頁)
- 50) 宇都宮大学中村ゼミ 氏家祐太 佐々木彩 佐藤佳奈2012「沿岸地域の震災観光復興」 <http://gyosei.mine.utsunomiya-u.ac.jp/2012joint/kyotu.pdf> (2025年1月13日閲覧)
- 51) 「茨城の観光レクリエーション現況(令和元(2019)年観光客動態調査報告)」18頁 <https://www.pref.ibaraki.jp/shokorodo/kanbutsu/kikaku/documents/r1rekugen.pdf>
- 52) 大洗町生活環境課2019第2次大洗町環境基本計画11頁 <https://www.town.oarai.lg.jp/wp/wp-content/uploads/2021/03/%E7%AC%AC2%E6%AC%A1%E5%A4%A7%E6%B4%97%E7%94%BA%E7%92%B0%E5%A2%83%E5%9F%BA%E6%9C%AC%E8%A8%88%E7%94%BB%EF%BC%88PDF%EF%BC%89.pdf>
- 53) 渡邊瑛季・阿部依子・伊藤瑞希・猪股泰広 王 瑩・名倉一希・松原伽那・山下清海2016「茨城県大洗町における海浜観光地域の継続的発展要因」地域研究年報10頁)
- 54) 栗原敬太 高橋良太 飯島晃彦2020「大洗サーフレジェンドヒストリー」 <https://note.com/surflgndhistory> (2025年1月13日閲覧)
- 55) 里海邸 金波楼本邸 公式ブログ2005年5月15日 <https://blog.goo.ne.jp/kinparoman/e/7692b45c66a4942d8e1e1e996707810e> (2025年1月13日閲覧)
- 56) 大洗サーフ・ライフセービング・クラブ <https://elnino.jp/>
- 57) 大洗あんこう鍋の歴史を紐解く2016大洗旅館組合公式サイト <https://oarai-yado.com/osusume/feature> (2025年1月13日閲覧)
- 58) 大洗観光協会会長 大里明2022「コンテンツツーリズムがもたらした文化観光の可能性」第5回埋蔵文化財シンポジウム発表資料集 文化と観光～「これまで」をみがき,「これから」へつなぐ～ 27-32頁
- 59) 佐藤壮太・渡辺隼矢・坂本優紀・川添航・喜馬佳也乃・松井圭介2018「リピーターの観光行動からみたアニメツーリズムの持続性ー茨城県大洗町「ガールズ&パンツァー」を事例としてー」筑波大学 人文地理学研究40-41頁
- 60) Aya Shigenobu「神話の舞台となった, 日本各地の聖地7。」『カーサ ブルータス』2020年1月号 <https://casabrutus.com/categories/travel/127230>
- 61) Haruna Koutake 2018「太平洋を望む鳥居と初日の出に向かい, 新年の誓いを。「初日の出奉拝式」が圧巻! 2019年の初詣は, 茨城(大洗磯前神社)へ。」Hanako 1168号 <https://hanako.tokyo/learn/69522/#heading-5>
- 62) 佐藤寛2022「潤沼のラムサール条約登録への道程」中央学院大学1-14頁 <https://www.cgu.ac.jp/albums/abm.php?d=364&f=abm00001831.pdf&n=%E6%B6%B8%E6%B2%BC%E3%81%AE%E3%83%A9%E3%83%A0%E3%82%B5%E3%83%BC%E3%83%AB%E6%9D%A1%E7%B4%84%E7%99%BB%E9%8C%B2%E6%B9%BF%E5%9C%B0%E3%81%B8%E3%81%AE%E9%81%93%E7%A8%8B.pdf>
- 63) 大山壮郎2022「砂浜図書館」, 大洗の一隅を照らす「うみまち照らす」第5回埋蔵文化財シンポジウム発表資料集 文化と観光～「これまで」をみがき,「これから」へつなぐ～ 33-40頁)
- 64) 渡邊瑛季・阿部依子・伊藤瑞希・猪股泰広 王 瑩・名倉一希・松原伽那・山下清海 2016「茨城県大洗

町における海浜観光地域の継続的発展要因」地域研究年報11頁)

- 65) 李 勇昕2024地域間交流におけるインターローカリティの生成—「被災地」茨城県大洗町と「未災地」高知県黒潮町を事例に— 日本災害復興学会論文集 No.23, 2024.1 <https://f-gakkai.net/wp-content/uploads/2024/02/23-04.pdf>
- 66) 潮間帯通信社 2024「遠く離れて」 https://note.com/tidalzone_na/n/n117bee45efd1 (2025年1月13日閲覧)
- 67) 趣味研究者・杉山昂平2021シリアスレジャーとはなにか?——「好きを仕事に」しない道をつくる <https://slowinternet.jp/article/20210823/> (2025年1月13日閲覧)
- 68) 水戸経済新聞2019「大洗で「Tシャツアート展」初開催 砂浜に美術館」 <https://mito.keizai.biz/headline/1144/> (2025年1月13日閲覧)
- 69) 茨城新聞記事2020「美しい海辺守りたい 大洗の清掃活動を続けるボランティア 金沢真里さん」
- 70) 株式会社Coelacanth 地域から価値をつくる, まちの編集社。 <https://coelacanth-oarai.com/> (2025年1月13日閲覧)
- 71) わづくる株式会社 人生が彩る, 自分らしく生きる社会を <https://www.ouroom-oarai.com/company> (2025年1月13日閲覧)
- 72) 宇田川裕喜2019「観光の終焉を宣言したコペンハーゲンの歩き方」エコッツェリア <https://www.ecozzeria.jp/series/column/column190625.html> (2025年1月13日閲覧)
- 73) 観光研究 最前線「地域のブランド力を磨く 中谷 健太郎」観光文化260号 財団法人日本交通公社 <https://www.jtb.or.jp/tourism-culture/bunka260/> (2025年1月13日閲覧)

(かまだ のぶひさ)

(いしい せいし)

(までのこうじ ただあき)

The Formation of Tourist Attractions in Oarai Town, Ibaraki Prefecture, Japan: The Development of Local Culture and the Process of Formation and Development of Tourist Attractions

Nobuhisa KAMADA, Seishi ISHII, Tadaaki MADENOKOJI

Abstract

This study examines the formation of Oarai Town in Ibaraki Prefecture as a tourist destination, tracing its development from ancient times to the present day. The analysis focuses on the town's distinctive lifestyle and cultural heritage, its natural environment, and its evolution as a "recreational area". Furthermore, the study addresses the current status and challenges faced by the town's tourism sector, which has continued to develop despite significant adversities such as the Great East Japan Earthquake and the COVID-19 pandemic.

Keywords: Oarai Town, Ibaraki Prefecture, Tourist Destination Formation, Recreational Area, Area Capability, Great East Japan Earthquake, COVID-19 Pandemic.